氷の王妃

素子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

氷の王妃

【コード】

N4490Z

【作者名】

素子

【あらすじ】

氷の王妃とあだなされる、泣けない女が泣けるまで。

夢の中で何かを必死に探していたような気がする。気ばかり焦って、でも探し物は見つからなくて、そのうちにずきずきとする痛みを取って代わる。

するりと何かが去っていく気配がした。引き止めたくて必死に手を伸ばしても何も掴み取れない。呼びかける声は水の中のように不明瞭だ。

待つて。お願い、行かないで。私の。

「お目覚めですか」

聞き覚えのある声に見覚えのある景色。ここは寝室で呼びかけた侍女のエルマが目赤くしている。何故日の高いうちから寝台に横たわっているのだろう。

常に情報を得て状況を把握して立ち回ることが染み付いているクリスティーナは、いつもと同じように質問しようとした。

そちらに顔を向けて起き上がるうとして、ひどく背中が痛むことに気付く。

「わたくしはどうしたというの？」

「王妃様、昼間に階段から転落なさったのです。それで……」

いいよどみ、涙を流す様子で理解する。すうっと血の気が引いていくのが分かる。寝ていなかったらおそらく倒れていただろう。途端、痛みが耐え難いものになる。同時に下腹部にも違和感を感じた。無意識に上掛けの下で腹部に手をやり、クリスティーナは感情をのせない声音で侍医を呼ぶようとエルマに申し付けた。

「ご気分はいかがですか」

「背中と腰が痛むほかは。駄目だったのですね？」

初老の侍医はてきばきと質問をして診察をし、目的にかなった薬を用意していたがクリスティーナの一言でその手を止めた。そして改めて腹部の診察をはじめた。

クリスティーナは黙って身を任せる。診察が終わって手を洗った侍医の目には同情の色がある。それでもきちんとした回答をよこした。

「お気の毒なことです。今回王妃様は腰を強打されました。今後のことは現段階では予測は難しいのです。ただ、何とも申し上げにくいのですが、次に妊娠される可能性は低くなつたかと存じます」

「そう、陛下のお子を流した挙句に今後の妊娠も難しい。そう言うことですね？」

「仰せの通りにございます」

「分かりました。少し、休みます」

寝る前にと痛み止めだけを飲むようにと指示して侍医は寢室を出て行った。

待ちかねたようにエルマが近くにくる。それまでも抑えた嗚咽は聞こえていたが、今は誰はばかることなくぼろぼろと泣いて、握り締めている手巾が随分と重くなっている様子だ。

「王妃様、おいたわしい。あの階段に油が塗ってあったのです。きつと側室の」

「滅多なことは言うのもではなくてよ、エルマ」

「ですが王妃様がお倒れになって大騒ぎしていた最中、私も慌てて階段を下りたのです。その時に足を滑らせました。この目で油が塗られているのを見ました。指でも確認をしたのです」

クリスティーナの頭にその時の様子が浮かび上がる。ようやく気分がよくなり、今を盛りに咲いている花を見ようと庭園に行こうとして、階段を下りていたのは間違いない。

その中ほどで急に足を滑らせたのもだ。あとは一瞬のことで景色がめまぐるしく変わったこと意外は覚えていない。悲鳴すらあげた覚えもなかった。

とっさに手すりを掴もうとしかねわずに、空を切った自分の手だけを妙に覚えている。

「張替えのためにと絨毯をはがしてありました。そうでなければ王妃様が転落なさることもありませんでしたのに」

エルマは悔しさのあまりに身を震わせる。

対するクリスティーナはその情報を組み上げる。であれば準備期間を設けての周到な計画に違いない。王族専用の階段。クリスティーナは妊娠してから中央ではなく端を下りるようになっていた。それを知っていて準備のできる人物。

侍医を買収できなかったから実力行使に出たという線か。城の実務を担当する者に今回の立役者がいる。出自や縁戚などを組み合わせればきつと一人の人物に行き着くはずだ。

直接の指示は側室の令嬢ではなく父親の侯爵だろう。

内心で冷笑が浮かぶ。後ろ盾のない王妃でもそれが子供を産めば影響力は小さくない。お飾りの王妃と安心していたところに今回の妊娠が発表されて、城内に少なくない騒ぎをもたらしたのは承知している。

未来の国王の祖父の立場を得るためになりふり構わずということか。

「陛下は？」

クリスティーナの短い質問に、エルマははっとした顔を見せた。それだけで反応が察せられる。そう、いつものことなのだ。

「王妃様の意識がない間に報告がなされたと聞き及んでおります」

その後は聞かなくても分かる。目覚めたときに侍女のエルマがいなかったこと。それがここでの自分の立場を表しているのだから。

おそらく報告を聞きはした。そして聞き流したのだろう。

そうは思っても何の感慨もわかない。

「陛下には申し訳ないことになったけれど、安堵されたのかしら」

「王妃様っ、そんな」

気色ばんだエルマが続けようとした時に、大勢の人の気配がした。

手を上げてエルマを留める。はっと表情をひきしめた侍女は寝台の側から立ち上がって壁際に下がる。

先触れもなく扉が開いて近衛を従えた国王が入ってきた。近衛を扉の内側に控えさせて、国王一人がまっすぐに寝台を目指し、隅に控えたエルマが先程までいた場所に立つ。

国王は立ったままクリスティーナを見下ろした。

「子を流したそうだな」

「陛下」

「そなたが踵の高い靴を履いていたせいで階段から落ちたというのは本当か？」

冷やかな声とともに、寝台に放り投げられた片方の靴をクリステイーナは見つめた。

子を宿したと知ってからは履かなくなっていた、でも以前は気に入りだった靴だ。他の靴と一緒に衣裳部屋に保管されているはずの靴。

クリステイーナの視線は靴から、国王へと移った。その視線は冷静だった。

「わたくしが履いていたものとは違いますが」

「階段下に転がっていたと報告の者が持ってきた」

内通者に掃除か衣装を担当する侍女が追加された。エルマが口を手を当てている様子から、彼女は内通者からは除外している。

もともと国元から同道した唯一の侍女なのだから、最初から容疑者にも入れてはいないが。

「陛下はどう思われるのですか？」

「事實は、そなたが階段から落ちて私の子を流した、踵の高い靴を残してだ」

「では、そういうことなのでしょう」

クリステイーナを見下ろす国王の表情が険しくなる。肩から腕に力が入り鍛えた体の線がいかつくなる。自分が男であれば殴られているかもしれない、とクリステイーナは感じた。

一瞬の激情を抑え込み国王は己を取り戻した。

「弁解もせぬか。そして泣きもしない。全くそなたには氷の王妃の名称が相応しい」

何をされても言われても表情を変えない。

北国から嫁いだこの色素の薄い王妃は、はじめは近寄りがたさから、そのうちに数々の噂話からいつからか氷の王妃と呼ばれていた。今もその瞳は冴え冴えと国王を見つめている。そこには何の感情も秘めていないように見えた。

用件はそれだけとばかりに国王はきびすを返す。

その背中によく通る声が届いた。

「陛下、子供に関してはお詫び申し上げます」

「もういい」

振り返らずに国王は出て行った。

重い音をたてて扉が閉まるのを待って、クリスティーナは細く長い溜息をついた。

エルマはおいたわしいと側で泣く。しばらく気の済むまで泣かせておいて、クリスティーナはエルマに告げた。

「休みます。薬をこれに」

寝台から起き上がれないので手を貸してもらって枕を何個も重ねて上体を起こし、薬を飲んだ。苦勞しながらゆっくりと体を横たえてクリスティーナは目を閉じる。

エルマはそんな女主人の上掛けを整えた後に退出した。

「泣きもしない、か。泣き方などとうに忘れてしまっているのに」

抑揚なくクリスティーナは呟く。

この期に及んでも泣きもせず取り乱しもしない。できない。

また氷の王妃という名称を補完する出来事が起きたと面白おかしく噂されるのだろうと思っても、何の感慨もない。

空っぽ。身も心も空っぽなのだと言覚する。

小国の王女が嫁いだ先は繁栄著しい、自国と比較すればまだ歴史の浅い国。

完全なる政略の上の婚姻に温かいものは通わなかった。冷えた関係を国王は隠しもせず自国の貴族から側室をめとった。以降、あからさまではないにしても周囲はよそよそしく、それをよろうための冷静さは、情の無い冷たさと受け取られる。

よつやくできた子供もこんなことになって。

お腹は平らだったがつわりはあった。それでここに子供が、国王陛下との子供がいるのだと実感できていたのに、今はお腹の中が空っぽなのだ。

身内にあつたくすぐつたさや温かさは、空虚感と痛みに取って代わられている。喪失感が大きく考えることすらおぼつかない。

ここに在ったものは消え去って戻らない。

「ごめんなさい」

何もつかめなかった手を見ながらぼつりとこぼす。

クリスティーナの謝罪の言葉は誰にも聞かれなかった。

国王ランドルフは朝から執務に追われていた。午後は隣国の使者と会談した後に城下に足を伸ばす用事もあつて、早い時間から書類と格闘している。疲れも見せず内容に吟味し、必要なら宰相や補佐官からの助言などを取り入れつつ、ようやく最後の署名を終えた。眉間を指でもみほぐしながら、顔を上げるとちょうど間の悪いところに補佐官が新たな書類を持ってきたようだ。仕事を終えたと思つた瞬間に持つてこられるほど腹立たしいものはない。

ただ、その不機嫌を補佐官にぶつけるわけにもいかないので、ランドルフはその書類を受け取った。

「これは？」

「王妃様のご病状を侍医が報告したものです」

真面目な顔になりランドルフは書類に目を落とした。詳細な報告書は何枚もあり、それにじっくり読んだ後でランドルフはぎし、と椅子に背を預けた。高い天井と精緻な装飾を見上げその目を閉じた。宰相がいぶかしげな声をかけた。

「陛下？ 王妃様のご容態はいかがでしょうか」

あの日以来王妃は寝台から離れることなく療養を続けている。食事も寝台で取っているらしく、側には国からつれて来た侍女が絶えず控えている状態だ。寝室に入れるのはごく限られた人物のみ。

そんな一人である侍医の報告書を宰相に手渡ししながら、ランドルフは告げる。

「まだ少量の出血が続いているらしい。微熱もあるそうだ」

王妃が懐妊して 流産したことはまたたく間に城内に広がった。ランドルフがクリスティーナを迎えて数年、ようやくのことだけに人々は注目し関心をよせていた。側室との間にも子は設けてはおらず、順調にいけば第一子のはずだったのに。

「それは……さぞお辛いことでしょうな」

「どうだろうか。私が行った時はいつもの顔だったぞ」

冷たい人形のような王妃の姿を思い出し皮肉な笑いが浮かぶ。

北国特有の色の白さと色素の薄さで隙なく振舞われると、ひどく人間味が失せているように感じられる。靴を寝台に放り投げて責を問うた時にも、いつもと変わらずに氷河のような薄青い瞳で見つめ、抑揚の無い声で返答した。

子供を亡くしたばかりとはとても思えない感情の起伏のなさだった。

「案外、私の子供など産む気もなかったのかもしれない」

「陛下、そのようなことは……」

「戯言だ」

聞いている者が宰相しかいないから漏らせる本音でもあった。自分にすら亡くした子供へのいくばくかの感情はあるのに、当の本人に気配が感じられないことがランドルフの苛立ちを誘っていた。

ただこの手のことは決して本音を漏らしてはならない。様々な思惑や憶測をのせてすぐに話は広がる。国王自らの発言となれば、『事故』が『故意』になりかねない。

王妃本人はどう捉えるか知ったことではないが、仮にも一国の王女であり自分の王妃である。波風は立てる必要は無い。

「陛下、お見舞はなさらないのですか？」

随分と年上の宰相が穏やかな顔で探りを入れてくる。この宰相にかかつては、自分などいつまで経っても頼りない若造のままだろうと思いつながら、聞かれたことには答える。

「……花は贈っている」

それで充分だろうと言外に匂わし、昼食を取るべく執務室を離れる。壮麗な廊下を歩き、階段に目をやる。真新しい絨毯が一分の隙もなく敷き詰められていた。

あの時、階段に絨毯さえ敷いてあればその場でこけるくらいで済んでいたかもしれない。いや、あんな踵の高い靴を履いていたのなら結局は同じことだっただろうか。

絨毯の赤の残像がちらつき、ランドルフの中にさざなみをたてる。

午後の用件は比較的早く済んでランドルフは城へと戻った。夕食までは特別用事もない。空き時間をどうしようと少しばかり悩んだ後で、ふと思いついて王妃の部屋へと赴いた。扉を警護する近衛、控えの間に待機する侍医、壁際に控える侍女たちの前を過ぎて寝室へと立ち入る。

部屋は薄暗かった。側付きの侍女、エルマがランドルフの訪れに立ち上がって礼をとり、場を譲る。

クリスティーナは眠っていた。微熱が続いているとの報告どおりに、陶器のような白い頬に薄紅がさしていた。薄い色の金髪はゆるく編んで顔の左側に流してある。

ランドルフは眠るクリスティーナの様子をじっと眺めた。

この生き人形のような王妃が自分の元に来た日を思い出しながら。歴史はあっても小さな北国は当初完全に支配下に置く予定であった。

思いがけず鉱物資源が豊富なことが判明し、その流通加工と原料の供給という相互利益が考慮され同盟に変更された。

その証として、ランドルフとクリスティーナの婚姻がなされたのだ。

どこもかしこも色素の薄いクリスティーナは、淡い色目のドレスに身を包み自国へとやってきた。その硝子のような瞳には何の感情もなく、儀礼的にさしだした手に重ねられた指先さえひどく冷たかった。

人形のような 当初はほめ言葉だったはずの形容は、次第に冷たい印象からむしろ欠点の代名詞に変わっていった。

ランドルフとて政略で迎えたからとはいえ、冷淡に扱うつもりはなかった。華奢な姿態は本当に硝子細工のようで、力を入れれば壊れそうな気がして接し方に戸惑ったのを覚えている。

ただ何をしても、何を話しかけても礼儀は申し分ないが生き生きとした反応がない。贈り物に感謝の言葉は述べるが実感がこもっていないように感じられる。大して嬉しそうでないので、次第に贈る気も失せていく。

話をすれば知識も教養もあるのだが、会話を弾ませようとする意図がない。

少しずつ失望と諦めが大きくなり、なかなか子供にも恵まれなかったので側妃を迎えた。それすらも冷ややかに受け流された。

おのおのの寝室の他に共用の寝室があるが、クリスティーナがそこに来るのは子供がでやすいとされる数日のみ。義務でいられても食指がうごくはずもなく、互いに背を向けて広い寝台の端と端で休む始末だ。

つい側妃に温もりと慰めを求めてしまっていた。

側妃の部屋から深夜赴いて、側妃の香水の香りをまとわせたまま寝台にすべりこんでも嫉妬するでもなく、硝子玉のような瞳がゆら

ぐこともない。

義務感から寢室を共にしてようやくの懐妊であったのに最悪の形でぶち壊された。

「……………」

思いがけずクリスティーナが苦しそうな声を上げた。眉がひそめられかぶりをふるように顔が横向けられる。上掛けを握り締めている姿はひどく人間くさい。

珍しいこともあるものだ。とランドルフは興味をそそられた。

やがて閉じていた目蓋が開き、青い瞳がのぞく。いつになく瞳が潤んでいるように思えた。

「どうした、辛いのか？」

ぼんやりと視線をさまよわせてランドルフを認める。徐々に焦点があつてきてクリスティーナはいいえ、と否定した。

「陛下こそどうなされました？」

「見舞いに来たつもりなのだが」

「…………それは、わざわざありがとうございます」

弱っている時でさえ隙を見せない。目覚めればもういつもの、氷の王妃だ。

ランドルフは胸に宿った憐憫の情がすうっと消えていくのを感じた。そしてクリスティーナの発言が決定付けた。

「陛下。花を贈ってくださいるのはありがたいのですが、今は」

「気に入らぬか」

「いいえ、とても綺麗です。ただ、今は花をあまり見たくないの

す

「私が贈ったからだろう。分かった、もう花は贈らぬ」

物をほしがらないクリステイーナも花だけは受け取っていたのだが、それすら迷惑かとランドルフは鼻白む。どこまでも相容れないのかと冷え冷えとした心地でランドルフはきびすをかえた。食欲はとうに失せた。側妃の侯爵令嬢をその足で訪問する。

「まあ、陛下。いらっしやるとは思いませんでした。私、感激です」

突然の訪問にも全身で歓迎の意を表す側妃のブレンダに、ささくれ立っていた神経が和らぐ思いがする。夕食をとっていたブレンダに付き合っただけで軽くつまみ、酒を飲んで二人きりとなる。

ブレンダがランドルフの胸に顔をすりよせた。

「陛下、このたびのお子様のこと。さぞお辛かったですでしょう。私も考えるだけで悲しくて……」

見るとほろほろと涙をこぼしてランドルフを見上げている。その目尻に親指をはわせて涙を拭う。

「そなたは優しいな。そなたに子供ができていればよかったのに」「ああ、陛下。もったいないお言葉です」

すがりついてきたブレンダを腕に抱いて、同じ女でこうも違うかと醒めた思いがぶり返す。今はただこの温かく柔らかい存在に溺れようと、抱きしめる力を強めた。

エルマは目覚めたクリステイーナの背中に枕をあてがって、消化

がよいようにと煮込んだスープの皿を手渡した。機械的に数口飲み込んで、クリスティーナは皿を下げさせた。

「陛下のご不興を買ってしまったわ」

美しい花の飾られた花瓶を見つめながらクリスティーナが囁く。

エルマは唇を噛み締めた。クリスティーナが「今は」花を見たくない理由など決まっている。あの日、花を見に庭園に行こうとした自分を責めているのだ。

花は嫌でもあの日のことを思い起こさせる。血も凍るような一瞬と、その後の辛い現実を。

「王妃様ももう少し詳しく理由をおっしゃればよろしいのに」

クリスティーナが王女の頃から側についていたエルマは、つい主従の垣根を越えて本音を漏らしてしまった。

口を清めて再び寝台に横たわったクリスティーナが、困ったように微笑んだ。

この国の人間はほとんど目にするこのない、王妃の微笑は物悲しかった。

「そうできたなら良かったのに」

ようやくクリステイーナが寝台から離れられるようになった頃には、ランドルフからの見舞いは途絶えて久しかった。

一時は腰を強打したせいで歩けるかとまで危惧されていたが、ゆつくりと起きたり座ったり寝室の中を歩くことで侍医の顔に安堵が広がる。

クリステイーナはぼんやりと窓の外を眺めることが増えていた。シヨールを羽織ったクリステイーナの瞳は、まばたきもせずに遠い街並みや山々を見つめていた。

「王妃様、食事を用意しましたのでお召し上がりください」
「ええ」

もともとあまり食がすすむ性質ではなかったのが、寝込んでからはいつそう細くなっていた。エルマに強く促されて口にはするものの、そうでなければ何も食べないのではと思うほどだった。

「もう食べられないの。ごめんなさい、下げて」

申し訳程度に数口つついて、クリステイーナは給仕の侍女に告げた。侍女はためらいがちに皿を下げる。せめてと香りのよいお茶を淹れて、下がっていった。

少しずつ熱いお茶を飲んで、クリステイーナは寝込んでいた間にきた見舞いの把握と、礼状を書くために王妃付きの補佐官を呼んだ。直々に礼状を書く必要のあるもの、祐筆に代筆させて署名だけをするものなどに分けられたものを処理していく。

「王妃様、あまり根をおつめになると、お体に障ります」

補佐官が進言した頃には、一通りの署名が終わっていた。クリスティーナはペンを置いて補佐官に頷いて、執務用の机から離れた。

「王妃様、このたびのことは、あの……お気の毒でした」

まだ年若い補佐官が言葉を選んで慰めてくれる。クリスティーナは、その顔をまじまじと眺めた。

「ありがとう。教えてくれないかしら、今度のことはどういう風に言われているの？」

「あの、王妃様が踵の高い靴をお履きになっていて、階段から……と」

「そう、もういいわ。明日以降の公務も徐々に慣らしていくのでよろしくね」

補佐官が出て行ったのを確認してクリスティーナはふうと息を吐いた。

まだ本調子ではないので、体が重い。それ以上に噂のことで頭が痛い。

誰が発端か、どこから経由で広まったのか今から確認できるだろうか。国王のランドルフですらそのように報告を受けて、証拠の靴を寝台に放り投げたのだからこれを覆すのは難しいだろう。

今はまだ『事故』でもいつなんどき、これが『王妃が故意にやった』と歪曲されるか分からない。そうなれば、問題はこの城の中だけではなく故国との関係にも影響を及ぼしてしまう。

婚姻名目で同盟を結んで鉱物資源の加工技術を持った人材が技術供与を始めて数年、ようやく故国でも一定の基準の加工が可能にな

っている。

關係を今断ち切るのは得策ではない。

ただ、自分は今まででさえはお飾りの王妃だったのが、今回のことで完全なる役立たずになってしまった。子供を望めない王妃なんて。

噂が歪曲されれば、誰が誰に話したかを丹念にたどれば発信源の特定は可能だろう。それが自分を追い落とす意思を持つ人物ということになる。

私的な居室に戻り、鏡に映る自分を客観的に眺めてみる。冷たい印象しかかもし出さない、本当に人形のようにだと自分でも思う。

「お母様に似ているって本当なのかしら」

そつと手を伸ばせば鏡の向こうからも手が伸びてくる。指先の触れた鏡はひどく冷たい。本当に氷できていているようだ。笑おうとしても顔が強張っていた。

「王妃様、お茶会にお招きいただきありがとうございます。お加減はもうよろしいのですか？」

「ありがとうございます、ブレンダ様。せつかくお見舞いをいただいたのにお礼が遅くなってしまうました」

王妃の部屋で側妃のブレンダを招いてお茶会が開かれていた。王妃の向かいに座るブレンダは魅力的だ。濃い金髪は目に眩しく、碧の瞳は輝いている。頬は薔薇色で唇も紅い。

氷の王妃とは対照的に春の化身のような侯爵令嬢だった。身につけている暖色系のドレスもよく似合っている。

クリスティーナは冷静にブレンダを観察する。今回の件で城内の

勢力はブレンダ側に傾く。ランドルフが通っていることも承知している。遠からず、ブレンダが懐妊するだろう。

ブレンダは未来の国王の母で満足するだろうか。王妃としてランドルフの横にあることを望むだろうか。

「……とても綺麗な花をありがとうございました」

「いいえ、品物をもっとも王妃様はなんでもお持ちですので」

にっこりと微笑んだブレンダに、控えた侍女達がひきつけられるのを感じる。ブレンダの部屋はたいへんに活気があるらしい。時めいている側妃であれば当然か。

自分付きの侍女も、本心ではブレンダ付きの方が良かったと思っていることだろう。自分に仕えていても張り合いはないだろうから

「わたくしは何も持つてはおりませぬ」

「ご冗談ばかり。ドレスも宝石も両手に余るほどお持ちではないですか」

そんなもの。ほとんどが故国から持つてきたもの、それも婚姻が決まって初めて利用価値の出た自分に仕立てられたものだ。ランドルフからは、婚儀をあげてほどなくそんな贈りものも途絶えた。本当に欲しいものはいっただって自分の手には入らない。

最初から手に入らなければ、存在を知らなければまだいい。手に入ると見せかけてすり抜けられる。何度もそんな経験を繰り返して、欲しいものなど欲しいと願う思いも失せていた。

「いいえ、わたくしには」

「王妃様は『王妃』ではないですか」

「あなたは『国母』の可能性を有しておいでではないですか」

お茶の香りはとてもよいのに、きな臭い。不快に思いクリスティーナは眉をひそめた。

ブレンダは王妃の地位を望んでいる。侯爵が後押しをするならば命が危うい。今まで以上に口にするものに気をつけなければならぬ。

物騒なことを考えているクリスティーナをよそに、ブレンダは碧の瞳をきらめかせた。

「私、今回のことはお気の毒だと存じます。でも、あまりに不注意です。陛下のお子様を宿していながらあのような軽率なことをなさるなんて。」

もし私が陛下のお子を身ごもったのなら、あらゆる危険から遠ざかりますのに」

「ブレンダ様、おっしゃる意味がよく分かりません」

「とぼけないで下さい。皆が言っています。王妃様が不用意に踵の高い靴を履いていたと」

「誰がそう言ったのです？」

冷たい声音に、ブレンダは言葉を飲み込んだ。薄青い瞳に貫かれてひどく決まり悪い思いになる。

「皆が、そう……」

「その皆とは誰なのです？ あの日、わたくしに衣装を着せた侍女は当日の靴も覚えていましたよ。かわいそうに、半狂乱になって靴のことを言っていましたから。」

もちろんわたくしも踵の高い靴など履いた覚えはありません」

ランドルフが信じている以上何を言っても無駄なのは分かっている。ただ、この過失が一人歩きすれば故国が低く見られてしまう。それは王女として育った自分には容認はできない。

たとえ故国で疎まれていた王女だとしても、国の体面を汚すわけにはいかない。

ぱちりと音をさせて扇を閉じる。

「王妃様のお言葉とはいえ……」

「ええ、陛下に報告もいつていましたからどうぞ取られても構いませんが、身に覚えのないことだけは明言しておきます」

一度、はつきりと疑惑は否定する。ランドルフにもそう言った。

信じるかどうかは彼ら次第だ。でも否定した事実だけは残しておかないと、付け入る隙を与えてしまう。

「せっかくのお茶が冷めてしまいましたね。代わりを出しましょう」

人形のような冷たい表情のまま、壁際に固まっている侍女に目配せをする。慌ててお湯と代わりの茶葉を用意する侍女達。これだけの人物が目撃をしたのだから、噂としても広がるだろう。

ここまですることができること。後は当日のことを覚えている冷静な第三者を探し出すこと。エルマを通じて調べさせなければ。

「王妃様は……」

ランドルフの寵愛を受けて元々美しかったのがさらに匂うように花開いたブレンダは、さすがに言葉を濁した。冷たい？ 血が通っている？ その辺りを言いたかったのだろう。淹れなおされたお茶を飲みながらクリスティーナは思考する。

面と向かって王妃の人格を攻撃するのはさすがに角が立つ。さっきの発言も取り様によっては充分に不敬なのだから。

「体調が完全に戻ったわけではありませんので、わたくしは公の場

に出る機会が減ります。どうぞ、陛下の支えになってくださいませ」
「王妃様。ええ、私にできることがあれば懸命につとめさせていただきます」

「わたくしも安心です」

きつと夜会などでランドルフの側にはべる姿を想像しているのだろう、ブレンダはさっと頬を赤らめた。なんて素直で一途な、可愛い娘なのだろう。

育ちのよさが繕わない表情に表れている。まだ自分に憎しみの目は向けられていない。自分を排除する意図は見取れない。ただ無邪気にランドルフの全てを望んで、誰より近くにいられる王妃の地位を望んでいるのだ。

淑女の礼をとってブレンダを見送った後でクリスティーナは書簡をしたためた。

封蝋をほどこしてエルマに渡す。一通は国王のランドルフに宛てて、もう一通は北の故国に宛てて。

「ねえ、エルマ。笑ってみてくれない？」

「王妃様？」

おかしな要望にエルマが首をかしげながらも笑ってみせる。クリスティーナはエルマの笑顔に、目を細めた。

「ありがとう」

一人になって鏡の前でクリスティーナは確認するように呟く。

「此度の件、王妃の地位、国の資源と技術と流通路……わたくしの手札はどこまで通用するかしら」

空っぽは空っぽなりに働かないと。
ふとブレンダの素直さを思い出す。

「あなたの欲しがっているものは、とっくにあなたのものなのに」

あなたこそ、何でも持っているでしょう？ 陛下の愛も、親の愛も。子供を持つ可能性も。

豊かな感情を表せる素直さも。

ランドルフはクリステイナからの書簡を受け取った。薄紫の便箋は、花とクリステイナの頭文字を刻んだ封蝋を施されている。

クリステイナはよく書簡をよこす。儀礼的で内容も用件のみのことが多いが、それでも時候のあいさつやほんの短い私的な文句も添えられている。その筆跡は美しく、乱れもなく本人同様の印象だ。

書簡の内容は、見舞いの礼と公務を休んだ詫び、そして……。

「今後は共用の寝室には赴かぬ、と」

義務で共にしていた寝室を今後は辞退するということが。侍医からの報告でひどく腰を打ったのは承知している。今後の懐妊は難しくなっただろうとも。その事情を踏まえてのこととは理解できるが、ひどく事務的にも思える。

これがブレンダだったら。ついそうして比較してしまうが、ブレンダであれば容易に想像がつくのだ。ひどく泣いて、すがりついて夜も一人でいるのを拒むだろう。人肌に触れていたがるに違いない。もし今後子供が望めそうにならなくなったら……身も世もないほどに悲しむだろう。

クリステイナは寝台から離れるやすぐにたまった執務を処理しだしたとか。

あれは女の皮をかぶった男なのかもしれない。側近としてあればあれほど冷静で淡々と物事を処理していくのは頼もしいだろう。王妃としての公務ぶりも申し分がないのだから。

笑いも泣きもせずに、失った子供の事などすでにあれの中ではなかったことになっているのかもしれない。やはり王妃ではなく、側

妃として娶るべきだったかと今更ながらに思わされる。

「まあいい。これで側妃のもとに通っても文句はないだろうから」

寝室でも乱れた様を見せなかった氷の王妃よりも、包み込んでくれる側妃の方に情が移っても当然だろう。ましてや子供が難しいとなった現状では、本人の方から断ってくれたのはありがたい話ではないか。

そうは思いながら先手を打たれた感が拭えず、ランドルフは愉快ではなかった。

クリステイーナは自室で自分の手を見つめていた。空っぽの手は、しかし何でもつかめるのではないか。瞳に決意を宿して、クリステイーナは自分の衣装担当の侍女を呼んだ。

「王妃様、お呼びとうかがいましたが」

「もつと近くに。あなた、わたくしが階段から落ちた日に靴のことでわたくしをかばってくれたそうですね」

普段はエルマ以外の侍女を側によせたりあまつさえ踏み込んだ会話もしない王妃だけに、何を言われるのかとびくびくしていた侍女はがちがちに緊張していたが、その言葉にはつと顔を上げた。

「王妃様、私、悔しかったのです。王妃様が踵の高い靴だなんてとんでもない。」

あの……ご懐妊が分かってから王妃様がどんなに着るものや履くものにお気を配られていたか知っていたものですから」

「ジエーン、だったわね。ありがとう、あなたがそんな風に見てくれたのを嬉しく思います」

ジェーン、と呼びかけられた侍女は目も口も丸くしてクリスティーナを見つめる。気高い女主人は、エルマとそれ以外の侍女に明確に線を引いていて名前を呼んだりすることはほとんどなかった。

着替えを手伝ったりするとありがとうとは言われていたが、さきほどのような真摯な響きではなく嬉しいなどと気持ちを表すこともなかった。

意外なことに頭は半分真っ白だが、ようやく言葉を口にする。

「もったいないお言葉です。王妃様」

「いいえ、当然のことです。あなたが嘔吐きにされてしまったのでしょうか？ そのことで辛い目にはあっていませんか？」

ジェーンはぶんぶんと首を振る。王妃様が心配してくれた、その事実の前には陰口など取るに足らないことに思えた。

目の前の女主人は硝子のようなうす青い瞳でじっと見つめてくる。前にはそれが怖かった。何を考えているのか分からない、人間離れしている。そんな印象だったからだ。

それが今は小首をかしげて自分の反応を待っている。人形が魔法で急に人間になったような気さえした。

「いいえ、私は大丈夫です」

「それならよかった。呼んだのはそれも気になっていたのだけれど、もう少し動きやすい簡素な服を用意してほしいのです」

「簡素な、ですか」

「お忍びで出かけるような類のものが欲しいのです」

今までのドレスをできるだけ手直ししてほしいと頼まれて、エルマも立ち会ってドレスを選び出した。

王妃はあまりドレスに関心がないようで自分から作ることも少な

かった。側妃のブレンダに国王がドレスをかなり贈っている話をやはり衣装担当のブレンダ付きの侍女に聞かされて、悔しい思いもしていた。

着飾れば誰よりも美しくためいきを誘うのもつたいないと思っ
てもいた。

「体は一つなのに贅沢なものね」

「王妃様、体面というものがございます」

エルマにたしなめられながらもドレスを選ぶ王妃を、ジェーンは不思議な思いで見つめながら腕にドレスをかけていく。

一通り選んで縫製の部署に持つていくことになった。部屋を出ようとして礼をすればまた王妃から呼び止められた。

「ジェーン、あなたは衣装担当ならお針子などとも親しいのかしら」

「はい、補修などの関係もありますから」

「では腕の良いお針子には仕事があるかしら」

ジェーンもエルマも王妃の意図が飲み込めずに、ちらりと顔を見
交わした。

「はい、町の手芸店でもそうですが腕の良いお針子は仕事に困りま
せん」

「知りたかったのはそれでした。どうもありがとう。仕事ぶりは元
から信頼していましたが、今回のことでああなたが信用するに足る侍
女だということがわかりました。これからもよろしく頼みます」

ジェーンはうつすらと涙を浮かべた。認められたのが嬉しく、心
の底から王妃に仕えようとする忠誠心が沸き起こってきた。

王妃付きの侍女が側妃のところに行きたいと愚痴っていたがとん

でもない。

「わ、私これまで以上にお仕えします。なんでもおっしやってください」

つかえながらそれだけを言うと、ドレスを両手にかかえて縫製部へと急いだ。

こんなに沢山王妃様と会話をしたのは初めてだ。今ほどあの人を綺麗にしたいという欲求にかられたことはない。細かく注文をつけて、このドレスを生まれ変わらせようと決意していた。

エルマは王妃を眺める。

「王妃様、ジェーンにお声をかけるなどこれまでありませんでしたね」

「あの娘はわたくしをかばってくれたのよ」

「自分に責が問われるのを恐れてのことかもしれません」

「それだつたら途中でわたくしから命令されて、と主張を変えていたと思わない？ 城内の者が、陛下ですら踵の高い靴を履いていたと信じているのに、あの娘は聞き取りの者の誘導にも最後までわたくしが高い靴を履いていなかったと言いつつ通したそうだから」

小国から来た王妃と侮る者の多かつた城内にあつて、侍女も例外ではない。国内貴族の令嬢が務める侍女の目は侯爵令嬢のブレンダにいきがちだ。自分のことをブレンダに流しているのも承知している。

何より欲しかったのは信頼できる味方。数年かけて城内の人間を吟味し、ようやくまずはと思える人物を見出した。

そのきっかけが事故というのは皮肉だが。

「あなたの調査では掃除担当の者、営繕の者、中堅どころの侍従、そして仲介役の伯爵といったところね」

「そこまではたどれました。伯爵様と侯爵様の繋がりには……」

「貴族社会の繋がりでしょう。陛下に疎まれて侯爵の邪魔者となれば貴族階級を取り込むのは困難ね」

一人で納得してクリステイーナが頷く。

「エルマ、わたくしは決めました。次は宰相殿にお会いしなければ空っぽなら失うものはない。今の自分にあるのは王女であることと、王妃であること。」

自業自得で国王陛下に疎まれた王妃であること。小国の出自と侮られていること。

「ねえ、エルマ。ジェーンのように素直に泣けるのっていらしいわね、慰めて守ってあげたくなくてこういう感じなのかしら」

「王妃様、男性のようなことをおっしゃいますな」

「もう女性である意味はないのだから、そう思うのかも」

素直に泣けて笑えるのなら。

私の前で笑うな。妃が亡くなったのになぜお前が生きている。なぜのうのうと笑えるのだ。

泣くな。気がめいる。誰かこれをよそに。私の前に連れてくるな。

お前の姿など見たくない。

北の故国でもなお寒々しい針葉樹に囲まれた離宮で、心は芯まで

凍えた。

温かくなっても融けることのない氷の大地のように冷え切ってしまっている。

「さて、氷の王妃がらしくないことを始めようかしら」

王妃の執務室に呼びつけられた宰相は言われたことに目を瞬かせた。

「孤児院、ですか」

「ええ、定期的に通いたいんです。執務の調整をお願いします。それと城下に屋敷も。小さいもので構いませんので」

この王妃は何をするつもりなのだろうか。冷静沈着、老獪と評判の宰相にも王妃の考えが読めない。

王妃は慈善活動はこれまでもしていたが、主として寄付に関するものだ。

「難しいですか？」

問われて熟考する。要望そのものは難しいものではない。調整に少し手間取ったとしても実現はする。ただ次の発言にはその意図を図りかねた。

「お忍びで通いたいんです」

「王妃様がお忍び、ですか」

貴婦人の慈善活動はいかに注目を集めて情け深い人物かという評

判を取るために行く、一石二鳥の暇つぶしのようなものだ。それをお忍びでとはどういふつもりだろう。

宰相の困惑を感じたのだろう、王妃は説明を始めた。

「わたくし、もう子供が難しいでしょう？　ですから親のいない子供の親代わりのような真似事がしたいんです。この孤児院は以前に寄付した際に子供の直筆で礼状が届いたので興味がありまして」

それに、と言葉が続く。

「陛下はわたくしのすることにさして関心は示さないでしょうから」だから好きにさせてください、とたたみかけられて宰相は承諾した。

王妃の慈善活動は褒められこそすれそしられるようなことではない。

ただ、子供が残念なことになっての行動に違和感も感じる。宰相は、この王妃は本心は語るまいと察した。ならば王妃の行動を注意深く見守ってその意図を探るだけだ。

「ただ、陛下へのご報告はさせていただきます」

「それは勿論」

大枠は固まり、細かい点は後日詰めるとして宰相との会見は和やかに終わった。さすがに有能な宰相だけあって、半月後にはこじんまりとした屋敷も手配して孤児院への訪問日も決めていた。

クリスティーナは手直したドレスに身をつつみ、目立たない髪形に結い上げて馬車に乗り込んだ。エルマとジェーンも同行し、王妃付きの近衛が一人は御者の横に座り、もう一人が馬で付き従う。

目にした孤児院はくたびれていた。あちこち補修が必要なようだし、子供の数に建物の大きさが見合っていない。

出迎えてくれたのは目尻の皺が優しい印象をかもし出す修道女で、院長だった。

応接室に通されてクリステイーナは院長と話をする。院長ははじめは驚いた様子でクリステイーナの話を聞いていたが、そのうちに目を潤ませて何度か拭いそして手を胸元に持っていき、祈りの形をとった。

その後は院長の案内で院内を見て回る。明らかに定員以上の子供達がいて、一様に興味深げに見つめている。服装、居住環境、栄養状態。さすがに質素ながら掃除は行き届いてはいるがその他は問題が山積みようだ。

冷静な目で見回していたクリステイーナは、刺すような視線を感じたが受け流した。馬車に足を向けようとしたクリステイーナは背後から呼びかけられた。

反抗的な目で見ているのは院でも年長の少年だ。体に合わないきつめの服を着ている。

「あんた王妃様だろう？ なにしに来たんだ？ ちょっと寄付して慈善家ぶるのか」

「ボブ、おだまりなさい。王妃様に失礼ですよ」

院長が慌てて止めに入るのをクリステイーナは制した。つい、とボブと呼ばれた少年に向き直る。

横と背後にいる近衛がす、と気配を変えるのも感じた。

「ここに手を入れようと思って来たの」

「そう言ってみんな少しの間だけは寄付したり、訪問してきたりするんだ。でもそのうち飽きてほったらかしだ。俺達はお貴族様の気

まぐれに振り回されるのはごめんなんだ」

「まあ、勇ましいこと。でも振り回されるのは力がないからでしょう？」

不敬とがめようとした近衛を目だけで黙らせてクリスティーナは少年に答えた。

ここで皮肉に笑えたならもっと効果的に少年の怒りを買えただろうに。

「あんたも気まぐれなんだろう。中途半端に手を出すくらいなら最初から手を差し伸べるな」

温もりを知った後で飽きたおもちゃのように放り出されたら、余計に惨めになるから。

クリスティーナはボブの言いたいことを察した。

これは拾い物かもしれない。

「勿論、気まぐれよ」

言い切ったクリスティーナにボブを含めて二の句が継げないようだ。

「わたくしの気まぐれがどの程度か実感するといいわ」

近衛と御者に指示して馬車の後ろに付けていた箱を持ってこさせる。中には本とお菓子、様々な大きさの服と靴が入っていた。

呆気にとられている少年の耳を涼やかな声がうった。

「これはほんのあいさつ代わり。明日には全員分の服と靴をよこすわ。院長様、あとはこれを」

院長に皮の袋を渡す。

「当座の費用です。たまった支払いに当ててください。後ほどわたくしの代理人が参りますので、先程の件を相談なさってください。それからボブ、だったかしら。あなた、力が欲しいのでしょうか？ わたくしもなの。だから吼えていないでしばらく静観なさい」

それだけ言つてクリステイナは馬車に乗り込んだ。

走り出した馬車で侍女二人がもの問いたげな顔をしている。後で、とだけ呟いてクリステイナは外を眺めた。宰相が用意してくれたという屋敷を目指して馬車は走る。

最初の一步を踏み出したと、氷の王妃はそう思った。

王妃様がおかしなことを始められたらしい。

噂ははじめは密やかに語られ始めた。

孤児院を訪問したクリスティーナ達は、宰相が用意した城下の屋敷に落ち着いた。使用人も少ないその屋敷は、芝生と灌木の庭を有していた。庭を眺めたクリスティーナは宰相の配慮を感じる。

ジェーンがお茶を淹れ、エルマと三人でテーブルについた。渋るジェーンだったが、クリスティーナがお座りなさいと言っただけで観念してテーブルを囲む。

お茶を飲んでクリスティーナはふう、と息を吐いた。

「王妃様、お考えを私どもにお教え願えませんか？」

エルマの質問に、ジェーンも内心で同意してクリスティーナの表情を伺う。そこにあるのは氷の王妃に相応しい、いつもと変わらない無表情だった。

テーブルの上にほっそりとした手をのせて、クリスティーナは指を組み合わせた。

「慈善事業に興味があったのは本当。今回のことで、わたくしの城内の居場所は縮小することが目に見えているでしょう？」

貴族の方々は……ジェーン、ごめんなさいね。陛下と侯爵になびくでしょう。だから城外でわたくしにできることがないか模索したの」

淡々と現状と今後を指摘するクリスティーナにエルマもジェーン

も黙り込んだ。

側妃に子供ができればその勢いはますます盛んになる。王妃は有名無実の、本当のお飾りになる。最悪王妃を廃そうとする動きが起るかもしれない。

一国の王女を迎えたのだから実現は難しいかもしれないが、国同士の勢力は不均衡なのでごり押しが通らないとも限らない。

ただそれが孤児院の援助とどう繋がるというのだろうか。

ジエーンは首をひねるが、エルマはクリスティーナの意図に気付いたようだ。

「王妃様。まわりくどうございます」

「わたくしにとっても未知のことなのだから、時間をかけてじっくりやっけていきたいの」

そう言って、クリスティーナは庭の緑を眺めた。

「それはそうと王妃様、なぜこのような屋敷を用意させたのですか？」

「ここに人を置いて孤児院との連絡所のように使いたいと思ったのが一つ。もう一つは孤児院で病気をもらうかもしれないでしょう？すぐに城に戻るとわたくしたちが病気を持ち込んでしまうかもしれない。だからここはいわば隔離の場のようなものでもあるの」

公務があるからそんなに長くいられるわけではないけれど、と断つてここのできる執務をするのだと言う。

「あとね、手芸でもしようと思って」

ここで刺繍やらレース編みをしたいのだと。時間が潰せるし作品は孤児院で売らせて収益にあてたいと。

「ゆくゆくは孤児院の子供達にも作らせたいの。針の技術も教えて、男の子は職人に弟子入りさせて金属加工でも覚えてもらいたいわ」
「それでお針子には職……ですか」
「教育と技術があれば生きていきやすいでしょう。わたくしはわたくしの考えがどこまで通用するか試してみたいの」

だからすでにある孤児院に手を貸す形で、事業をしてみたい。
ゆくゆくは育った人材を使ってみたい。城外に出るときのことを想定して。

クリステイナは自業自得の孤立と自分の立場を評価している。
このまま城に居続けるには多大な努力を要し、危険と隣り合わせになる。『事故』はいたるところで起きてても不思議ではないのだから慈悲で離宮にこもることを赦されればいい。最悪は命を狙われることになる。あるいはこちらに汚名をきせて放り出されるか。
帰る場所はとうにない。ならば。

「わたくしの気まぐれにつきあってもらえると都合が良いのだけだ」

エルマは小さく溜息をつき、ジェーンはしつかりと頷いた。
気まぐれというには大掛かりで長い時間も必要なのだが、クリステイナが自分で望んだ珍しいことでもある。

「それならさっそく始めましょうか」

三人で椅子に座って刺繍を始めた。糸や布も大量に運び込まれていてエルマはクリステイナの用意周到さに内心驚きと呆れを覚えた。クリステイナは慣れた手つきで緑と鳥を刺繍している。

王妃手ずからの刺繍……美談とともに売りつければ、高値で買う

貴族や商人は多いだろう。孤児院の知名度も上がる。興味が持たれれば養子や住み込みで雇おうかとする流れもおおきくもかもしれない。

親のいない子供達を、子供を失った王妃が援助する。

尊い行為のはずなのに、エルマは寂しさを抑えられなかった。

週に一度か十日に一度程度、王妃は城をあけて翌日か翌々日に戻る。三ヶ月も過ぎようかとしていた頃には、その行動は様々な憶測を呼び格好のお茶会の話題にもなっていた。

「地味な格好をなさって城を出られるのですって」

「ブレンダ様が時めいていらっしやるので、居辛いのではなくて？」

「元々が北の、言うなれば田舎のご出身ですし、城外の方がお気が楽なのかもしれませんね」

まあ、と貴族の夫人や令嬢たちが笑いさざめく。

「王妃様は孤児院に足をお運びだそうよ」

情報通と名高い伯爵夫人の言葉に、あらと失望ともとれる声がある。慈善事業であれば つまらないこと。

もっと面白い秘密だと思ったのにといった空気が広がる。

「ブレンダ様、王妃様はあなた様に遠慮なさっているのかもしれない。この機会に陛下の関心を独り占めになさってくださいな」

「まあ、皆様つたら。それは王妃様に失礼ではなくて？」

ブレンダは目の色に合わせたドレスを着て、それに負けないほど輝く瞳を向けた夫人にあてる。国王に愛されている自信は、美しい侯爵令嬢をますます魅力的に見せていた。今を盛りに咲き誇る

大輪の花のようだ。

実家の侯爵家も財力や地位は申し分ない。元は有力な王妃候補だったこともあって、気品に満ちている。

「いいえ、王妃様が陛下のお子様を残念なことにしてしまった後ですもの」

ブレンダが世継ぎを産めば、このお茶会に参加している貴族達にもおこぼれはあるだろう。

人形のような他国出身の王妃では、取り入っても旨味は少ない。そう判断して割りに早い時期から王妃の周囲から有力貴族の取り巻きは消えた。

代わりに蜜に群がるかのように、側妃になったブレンダの周囲は華やかだ。

「こればかりは私だけでは無理な話ですもの。気長に待ちますわ」

ブレンダの輝く笑顔からはそんなに長く待つ必要もないだろう。お茶会の参加者の間で明るい未来を確信するような、そんな空気が広がった。

ランドルフは宰相からクリスティーナの行動の報告を受けていた。

「孤児院の修繕を済ませ、近隣の土地と建物を買い上げて年長の者の宿舎と工房を作らせました。教師も手配して読み書きや計算を教えているようです」

「随分と入れ込んでいるようだな」

「年長の少年少女を宿舎から職人のところに通わせているようです。住み込みですと扱いが過酷な場合がありますので、通いにさせてい

ると聞き及びました」

ござつぱりした服を着て、意欲に燃えた年長の少年少女が職人の下で技術を学んでいるそうだ。

相場よりも安い賃金で構わないから雇って教えてくれと王妃からの書簡もつけていたらしく、職人にも孤児院側にも益がある。

「王妃は何をしているのだ」

「子供達の相手をしたり、一緒に遊んだりしているそうです」

「あれが、子供と遊ぶだと？」

ランドルフにはわかには信じられない。人形のような氷の王妃が子供達と遊ぶ？ 何かの冗談だろうか。

「私をかつぐつもりか？」

「いいえ、事実です」

「……王妃が次に孤児院を訪れるのはいつだ？」

装飾を抑えた地味な馬車で乗り付ければ、子供達の元気の良い声が聞こえる。

目立たないように周囲に配された護衛は宰相の指示だろう。直近の近衛は二人と聞いているが、要所に軽く十人以上が目を光らせている。

国王と認めて緊張の色を濃くする彼らに軽く頷いて、ランドルフは孤児院の門をくぐった。孤児院の庭は買い入れた土地を続きの庭にしたようで、まだ土の所が半分、緑の所が半分といったところだ。寒い中で子供達は元気に散らばっている。だが、どの子も一様に声を殺し、気配を消そうとしていた。

何をしているのだろうと恐縮している院長の後から庭に回る。

そこには目隠しをして、子供達を探そうとする王妃の姿があった。

「いいわよ。静かに逃げて」

そう言いながら、腕を前に伸ばして歩き始める。子供達はわざと王妃に近づき、気配に気付いた王妃がそちらを向くと手が届かないように逃げたり、しゃがんだり。それを見て他の子供達が口に手を当てて笑いをこらえている。

遠くで王妃様こつちと声をかけて王妃が近づくと、忍び足でよそに逃げる。

ランドルフはこの光景を黙って見入る。初めて見る王妃の姿だ。

素材と仕立てはいいのに地味に作ってあるドレスを着て、歩きやすそうな靴を履き、髪の毛も上の方で軽く結んで下半分は背中に流している。

音だけを頼りに子供達をつかまえようと戯れている。

私が見ているものは何だ？ 本当に王妃なのか？ ランドルフは自分の目で確認しながらもまだ半信半疑だった。

そのうちに何かの加減でか王妃がこちらに歩を進める。子供達のように避けようかと思った。孤児院で子供達と遊ぶという王妃の姿を確認できたのだから、目的はもう果たした。このままこつそりと馬車に戻ればいい。それでいいはずなのに。

付き従う近衛達が何とも言えない表情で自分を見ていることにも気づいているが、ランドルフはあえてその場を動かうとはしなかった。

クリスティーナの伸ばした手が自分の服に触れた、と思った次の瞬間。

「つかまえた」

初めて聞く興奮を含んだ声と共に胸の周りに腕を回された。抱きつかれたランドルフは驚きで声も出せずに、クリスティーナを見下ろす。

「誰かしら、男の子ね。ジョージ？ それともニール？ こんなに大きな子がいたかしら。近衛の人にはちゃんとよけるように言っているのだけれど」

クリスティーナが少し身を引いて離れようとした。自分でも何をしているか自覚せずに、ランドルフはクリスティーナの腰に腕をまわっていた。

片腕でクリスティーナを抱き、頭の後ろで結ばれた目隠しの結び目に手を伸ばした。

「誰です、わたくしを離しなさい」

固い声で離れようとするのを赦さずに、ランドルフは布を取り去った。待ちかねたように見上げた、薄青い瞳が驚きで揺らめいている。

昼の光の中で、これほど間近で見つめ合ったことはなかった。

「陛下、どうしてこんな所にいらっしゃるのですか」

かすれたような声がなぜか人間くさく聞こえて、ランドルフはこれは本当に氷の王妃だろうかと腕の中の存在を疑問に思うのを禁じえなかった。

「失礼いたしました」

庭を子供達を探して歩いていたせいか、クリスティーナの頬はうつすらと紅潮していた。下ろした髪の毛とあいまって少女めいて見える。

ただ口調はもういつものものに戻っていた。ランドルフの腕から抜け出て立つ姿は氷の王妃のものだった。

「孤児院に足を運んでいると聞いたので、様子を見に来たのだ」

わらわらと子供達が集まってきた。好奇心いっぱいランドルフを見上げている。

「おうひさま、この人だあれ？」

クリスティーナのドレスの裾を握った子供が聞いてくる。クリスティーナはかがんで、その子と視線を合わせた。自然に頭をなでている。

「この方はね、……明かしても？」

最後の言葉はランドルフに向けられた。かまわないと頷くと、クリスティーナは子供にゆっくりとした口調で教える。

「この方はね、国王様よ」

「こくおうさま？ 一番えらいひと？」

「そう、一番偉い方」

国王様と聞いて一斉に子供達の目が輝く。ランドルフは至近距離でこんなにも多くの子供達に囲まれることも、好奇心丸出しに見つめられることもあまりないので内心たじろぐ。クリスティーナは立ち上がり、子供達を見回した。

「おやつ時間よ。手を洗って院長先生からもらいなさい」

わあつと声を上げて子供達が院内へと駆けていく。クリスティーナはその後姿を目で追う。見守るような穏やかな表情に、しかしランドルフは穏やかではなかった。

風で乱れた髪の毛を払いながら『王妃』がランドルフに向き直る。

「わたくしも院内で手伝うことになっております。陛下はお戻りに？」

「……いや。私も付き合おう」

クリスティーナはランドルフを案内して院内に戻る。壁は明るい色の壁紙が張られ掃除も行き届いているようだ。最近増築されたような明るい食堂に、子供達がそろっていた。

クリスティーナはドレスの上からエプロンをかけて髪の毛をまとめて手を洗うと、小さい子供がおやつを食べる介助を始めた。

食堂内では侍女のエルマともう一人も同じように介助をしたり、こぼれたものの始末をしていたりと賑やかだ。

ランドルフは壁の前で王妃の様子を眺める。

服をよごさないようにと布をつけた子供に話しかけて、口元にスプーンをもっていく。口に入れると調子をあわせて傾けたスプーンを引き抜く。

「おいしい？ そう、よかった」

こんな優しい、甘い声も出せるのかと初めて知った。もつとねだられて、またスプーンでおやつをすくっては食べさせている。口元についたものをふき取ったりもしている。まるで 母親のように。

自分達の子供は失われてしまったのに。

ランドルフはこぶしを握り締めた。城では着替えから人の手を借りるような王妃が、ままごとのように他人を世話している。一体、どんな目的からだろうか。

これは氷の王妃なのだと自分に言い聞かせるように、ランドルフはクリスティーナへ探るような眼差しを注ぐ。気位の高い、よそよそしい、情のない王妃のはずなのだ。と頭の中で何度もくりかえす。

おやつが終わればまた庭で遊ぶ者、中で遊ぶ者と思い思いに散らばっていく。寝てしまった子供を王妃の近衛が抱き上げて、子供達の寝室へと運んでいく。

後は食器を片付けテーブルを拭いて、食堂は落ち着いた空間に戻った。

大人たちがテーブルについてお茶となる。ランドルフも行きがかり上、自分の近衛とともに風変わりなお茶会に参加することになった。

かざりけのない茶器に、悪くはないが最高級ではない茶葉。王妃はそれに不満な様子もなく静かにカップを口に運んでいる。

「子供が大勢ですと賑やかでしょう?」

「そうだな」

実に久しぶりの国王と王妃の会話だった。侍女も近衛も細心の注意を払ってこのやりとりに聞き入っているようだ。王妃は無表情ではあるがくつろいだ様子を見せている。対する国王も場に臆するこ

とはない。

しばらく無言でお茶を飲み、カップをソーサーに置いた王妃が国王に問う。

「この後は夕食の支度です。陛下はどうなさいますか？」

エルマが王妃の茶器を下げるのを横目で見ながらランドルフは少しの間思索する。

気まぐれでねじ込んだ孤児院訪問。帰城しないと侍従長や宰相がうるさいだろう。だが、好奇心が勝ってしまった。

「終わるまでここにいる」

「ではごゆっくり」

優雅に一礼してクリスティーナは食堂の続きの厨房へと姿を消した。

ランドルフはもう一杯茶を注いでもらいながら、少なからず自分が混乱しているのを感じる。

孤児院にいる王妃が、城での王妃と違っていているからだ。表情に乏しいのは変わりなく自分への態度もいつもと同じだが、子供達や孤児院の大人達、侍女や近衛に向けるまなざしや口調がどこか柔らかみを帯びていて眼差しも優しいような気がする。

自分だけが締め出されているような疎外感をランドルフは感じた。

王妃を抱き寄せてしまった手を見つめる。王妃から抱きつかれるのも初めてなら、公務以外で触れ合うのもいつだったか思い出せないほどだ。

違和感を感じたのはブレنداに馴染んだせいだろうか。そもそも抱きしめることなど絶えて久しかったからだろうか。

玄関の方から人の声がしたと思ったら、遊んでいた子供達よりも

年長の少年が入ってきた。多くの近衛と、悠然とした態度で座っているランドルフに少し臆しているようだ。

院長が最年長の少年だと説明した。

「名は？」

「ボブといえます」

聞けば鍛冶の工房に通っていると言う。待遇は悪くない、工房の職人は厳しいがよく教えてくれている、早く技術を学んで立ちたいと将来の夢を語った。

今は帰ってくると年下の子供達の世話をし、決まった曜日に教師から教えてもらっていると毎日の生活も説明した。

「王妃様のおかげです」

きっぱりと言い切った少年の目は澄んでいた。よほど王妃に信頼を寄せているらしい。

ランドルフは少年に、疑問に思っていたことを尋ねた。

「王妃はどうしてこんなことを始めたか、知っているか？」

「王妃様は気まぐれだと言っていました。あと、力が欲しいからって」

「力？」

ランドルフは聞き返したがボブという名の少年は間違いないと頷いた。このような場所でどんな力が得られると言うのか。

第一、王妃は既に権力を持っている。公には自分の次のだ。

ランドルフは首をかしげざるを得なかった。

思い立って厨房の様子をうかがうと、王妃が孤児院の修道女や年長の少女と一緒に野菜を切っていた。意外にも器用に刃物を扱って

いる。大きな鍋に材料を入れたり、肉を漬け汁に浸したりしている。

傍らの少女に話しかけられた時、一瞬王妃が笑ったように見えた。瞠目した次にはいつもの表情だったので見間違いと判断した。しかしやっていることは王妃としてはあるまじき労働であり家事だ。

これで何の力を得るのだ？

元々何を考えているか分からない王妃だが、いよいよ思考回路が謎だ。

ランドルフはまた食堂に戻り、手を顎にやって思索した。

食事もできあがってクリスティーナ達は孤児院を後にした。いつものように馬車に乗り込もうとしたクリスティーナに、国王の侍従が主の言葉を伝えた。クリスティーナと馬車の扉を開けた侍従との間でやり取りがなされた。

クリスティーナはしばし考え込んで、後ろに控えた侍女達と近衛に言葉少なに指示をした。そして一人だけ国王の侍従が控える馬車に乗り込んだ。

外見は地味だが内部は贅を凝らした中に、ランドルフがゆったりと座りクリスティーナを見ていた。クリスティーナが座席におちつくくと、馬車が走り出す。

しばらくの間、二人とも何も言わなかった。

「随分とあの孤児院に肩入れしているな。罪滅ぼしのつもりなのだろうか」

「罪滅ぼし　　そうかもしれません」

ランドルフの直接的な問いに、やや遅れてクリスティーナが返す。視線はランドルフの胸の高さだ。

抑揚のない冷静な声音は、かえってそらそらしく聞こえてしまう。

手を重ねて膝の上に置き端然と座っている姿は王妃そのものの品格で、先程の孤児院での様子が嘘のように思える。

「そなたは、あそこでどんな力を欲しているのだ？」

クリステイーナがランドルフをゆっくりと見つめた。ふいに庭で見つめ合った時のことが思い出されランドルフの鼓動が高鳴る。

「誰からそれを」

「ボブとかいう少年だ」

「ボブが。そうですか」

ボブと聞いてクリステイーナの表情がほんの少し緩んだ。親しい者を思い浮かべるような顔になる。

王妃が孤児院で結んだ絆が察せられて、また奇妙な疎外感を感じる。もう何年も親しい間柄ではなかったのに王妃が城の外に目を向けるようになった途端に、なぜ興味をそそられてしまうのだろうか。

「人として生きる力、でしょうか」

「なんだ、それは」

「わたくしは、孤児院の子供達と一緒に育てなおしをされているのです」

成人し、婚儀もあげて子供までできた王妃が育てなおしなどおかしなことを言うので、ランドルフは面食らった。

ランドルフが戸惑っている様子に、クリステイーナは内心でいかに今まで表面的な関係であったかと思う。踏み込んだ会話をしたことがないのでどういえばランドルフに伝わるかと悩む。

「最初はわたくしでも人の役に立つことができればと始めたのです

が、いつからか子供達から素直な感情や懸命に生きようとする強い心を教えられています。わたくしは人と接するのに向いていないと自覚しておりますので」

言葉を選びながら、気持ちの口にするのがこんなに難しいとは思う。人と距離をとり寄せ付けず、傷つけないように傷つけられないように振舞ってきたつけは大きい。

王族の誇りで表面を糊塗してきたように思うがそれも限界のようで、がらんどうの自分に嫌気がさしてはじめてきたことだ。

役目があるうちはよい。重要な、ほとんどそれだけを目的として生かされてきた自分がその役目を果たせなくなった時、この先をどうしていいか分からなくなってしまった。

お飾りの王妃で生き続けるべきか、生きられるのか。あるいは。

「……そなたの考えていることは分からぬ」

「分かるうとしてくださっただけ、ありがたく存じます」

軽く頭を下げる王妃に、ランドルフはやはり変わったと思う。今までの王妃であれば『申し訳ございません』で済ませていただろう。完璧な謝罪はそれ以上踏み込むことを冷やかに拒む。王妃はこちらの行動や考えに理解や共感の念を表すことは、ほとんどなかった。それがほんのわずかにせよ表情が変わるようになり、自己完結してしまっているようだが表面的でない考えを口にする。

初めて素の王妃を見出した気がした。

「それにしても、そなたから抱き付かれるとは思わなかった」

「あれは……偶然です」

「そうか、偶然か」

戯れ半分でランドルフは向かいに座るクリスティーナの腕を引いた。座席から腰が浮いたのを強引に引き寄せた。抱きしめて食堂で感じた違和感の正体に気付く。元々華奢だったのが記憶にあるのよりも一層。

「 やせたな」

ランドルフの予想外の行動に硬直していたクリスティーナが、ぴくりと肩を震わせた。力をこめれば本当に壊れてしまいそうだ。

やせてしまっくらいなら何故、とランドルフに諦めきれない思いがおこる。

「何故、踵の高い靴など履いたのだ」

「わたくしは、履いてはおりません。そのことは前にも申し上げたはずです」

王妃の声が硬質な響きを持ち、ひどく冷ややかに言い放たれる。

ぐいと胸を押されてランドルフは腕の力を緩めた。後ずさって座席に座りなおした王妃の顔に、表情はなかった。

先程までの穏やかな雰囲気は霧散してしまっている。目の前にいるのはまさしく氷の王妃だ。

「このような戯れはおやめください。ブレンダ様にしてさしあげればよろしいでしょう」

「そなたは私に触れられるのも嫌なのか？」

「わたくしに関わるのは時間の無駄だと申し上げたく。陛下に必要なのは一日も早いお世継ぎの誕生です」

王妃の内面がのぞけたかと思えたのに、すぐに氷壁が築かれてしまふ。

共用の寝室には赴かぬ。書簡でもそう記されていたではないか。ランドルフは奥歯をぐつと噛み締めた。

国王が王妃を伴って帰城したことはすぐに噂になった。

ブレンダは渡ってきた国王に身をよせる。国王も優しく抱きしめかえすが、ブレンダは背中に回した手で国王の服をきつく握り締める。

けして渡さない。そんな意思が込められた力の入れようだった。

クリスティーナは屋敷に寄らずに戻ってきたことを気にしたが、国王陛下自らが孤児院においてそのまま帰城したのだから病気云々は言っても仕方がない。

それよりも、と溜息をつく。自分の体に腕を回して抱きしめられた余韻をなぞる。

「子供達から素直な感情を学んでいると言いながら、わたくしのひねくれた態度はどうなの。救いようがないわ」

まずい対応と振り返り、反省の口調は苦かった。

基本的に顔を合わせないで済ませることは容易い。私的な交流が耐えて久しかったならなおさらだ。

ランドルフは王妃と孤児院から戻ってから、あえて王妃のことを考えることをやめた。 やめたつもりだった。

執務を行い、気が向けば側妃のところに渡る。

ただ執務の合間であるとか、側妃の前でも王妃の話題を自ら出すことはなく、ただ傍目からはほんの少しだけ心ここに在らずのよう
に思えた。

宰相と側妃はそれを敏感に察する。

「明後日の式典の手順はこのようになっております。今回、王妃様
と民に手を振る場面がございますので」

「その前の箇所が変更だというわけか」

式典の概要を記した書類を手に、ランドルフは頷いた。

王妃と手を振る。専用につ造つてあるバルコニーの上から、その区
画だけ特別に開放して集まった民に手を振る。国王と王妃の存在を
内外に示しながら、民の様子を間近に見られる機会だ。

昨年も、その前の年も王妃はよくできた人形のように手を振るだ
けだった。ランドルフと目を合わせるでもなく、ましてや微笑むこ
となどない。

民も笑わない王妃ということはよく知っていて、それでも普段ほ
とんど見ることはない王族を自分の目で見られる数少ない機会と、
庭に押し寄せて歓声をあげる。『国王様万歳』の声が『王妃様万歳』
よりも圧倒的に多いのが常だった。

手か、とランドルフは己の手を眺める。

孤児院で王妃を抱きしめ、馬車の中で拒絶された手。

触れられるのも嫌なのだと拒絶された手。ぐっとかぶしを握り締めてランドルフはくっと思菌を噛み締める。考えまいとするのに、気付くと孤児院での王妃のことを思い出している。

そんな自分にいささか嫌気もさしていた。

「そなたは王妃の孤児院訪問をどう思う？」

「たいへんご立派だと思います。公務に穴をあけることなくこなされているようですし」

あれからも定期的に王妃は孤児院に通っている。城下の屋敷に滞在しては城に戻っていた。屋敷のことを調べさせても不審なことはない。

誰かが訪問することもなく、接触するでもなくひっそりと過ごして城に戻ってくる。本当に単なる慈善活動らしいと、貴族や城の用人の関心も波が引くように沈静化していた。

ただ、ランドルフだけが気にしている。認めまいとしてはいてもだ。

「あそこでの王妃は、人が違っているように思えた」

「左様でございますか」

子供達と戯れて、間違いながらも抱きついてきた。あの時の腕の力と華奢な感触、興奮を内に秘めた声と側妃のとは異なるさわやかでいてどこか甘やかな香りが、何度側妃で上書きしようとも脳裏から消え去ってはくれない。

少し近づいたかと思えば、冷やかに遠ざかる氷のような無表情もだ。

「王妃は恐ろしく愛想はないが、あれは嘘をついたことがあつ

ただらうか？」

「王妃様がですか？ 私の記憶にはないように思いますが」

「そうだな、私にもない。ところで王妃が階段から落ちた日の報告書は信頼できるものであろうな？」

抽象的な質問から具体的な事柄の質問になり、目をまたたかせていた宰相は表情を改めた。

「はい、そのはずですが」

「王妃が踵の高い靴を履いていたのも間違いないとしてよいのだな？」

自身そう報告を受けて、階段下で転がっていたとされる靴も『証拠』として提出されて実際に手に取っている。

王妃が目覚めたと聞き及んで寝室へと赴き、寝台に放り投げたのも確かだ。だが。

「王妃様ご本人と、王妃様付きの侍女は一貫して否定をしております」

「侍女とやらの証言は報告書には？」

「記載はしてございます」

わが身可愛さでの証言であろうと結論付けられている、と言外に宰相はおわせる。ランドルフもその可能性は充分にあるとは思っているが、馬車での王妃の口調は捨ておけない気がした。

「もう一度、秘密裏にそなた自らで調べてはもらえぬだらうか」

「承りました。陛下、ブレンダ様のほかに新たな側妃を迎える話はいかがいたしましたでしょうか？」

王妃が懐妊してからその性別を含めて子供の誕生まで静観する構えだったのが、失われてしまった。以後の懐妊も期待できそうにない。

今現在、ランドルフの子供を産める女性は側妃のブレンダただ一人。それでは心もとないと、にわかには側妃をとの声が上がっている。もとより貴族にとつては世継ぎの祖父の地位は魅力的であるし、令嬢達にとつても同様だ。王妃がお飾りで無視できると思っていればなおさらだろう。

国王の隣に立てるかもしれないというのは、抗いがたい誘惑だ。

元王女である王妃と有力貴族である侯爵令嬢の側妃という取り合わせは、奇妙なつりあいを持っていて他の令嬢の参入を阻んでいたが王妃の『脱落』でそれが崩れた。

他の者にも機会が訪れたと感じ、またブレンダへの権力の集中を厭う空気もあいまつて新たな側妃をとの熱意が高まっている。

世継ぎのことを考えるなら、そして国の安定を考えるのなら新たな側妃は正しい選択のように思える。

ブレンダは確かに可愛らしくいじらしい。世継ぎの母としての身分も申し分ない。ただここに来て、ランドルフの中に王妃が無視できない存在として居座ってしまっていた。

政治的のみならず、個人的にだ。

「その話は一旦保留にしてくれ」

「承知しました。式典の後は夜会もありますれば」

そこで令嬢達を見初めればよいと示唆され、あいまいにランドルフは頷いた。

「国内外の招待客を迎える準備は？」

「整っております。王妃様の生国の北の国からも今回は王族の方が

いらつしやる予定ですが、到着がぎりぎりになりそうです」

「珍しいこともあるものだ。小国ながら誇り高くあまり他国には出てこないのに」

「最近は交流も盛んですし何より王妃様の縁続きですから」

王妃の親族かとランドルフは興味をそそられた。国王や王太子とは顔を合わせてはいるが、強烈な記憶はない。

式典前の慌しい空気にせかされるように、ランドルフは執務に戻った。

「陛下が新たな側妃をいうお話は本当なのでしょうが？」

ブレンドの耳に聞こえてきたのは屈辱的な内容だった。貴族の令嬢として愛想は良くしても、直情的な感情は演技のほかには出してはならない。

そう教育されてきたブレンドの心情を表すのは、テーブルの下できつく握られてたわむ扇子だけだった。

「まあ、そうなの？ でもまだ噂だけなのでしょう？」

つとめて声に不機嫌さを滲ませずにブレンドは話の主を見つめる。私的なお茶会は、親しい数人だけを集めて行われていた。仲のよい夫人や令嬢。ただ、令嬢の目の中に隠しきれない期待を見て取り、ブレンドは内心穏やかではいらなかった。新たな側妃として取り立てられるかもしれないと夢を見ている令嬢達。

自分の地位を脅かすつもり？

国王ランドルフから唯一愛されていると思っていた自信は、ここ最近ゆるぎないものではなくなっていた。

変わらず優しいのだが、以前と比べて渡りが間遠になっている。そばにいてもランドルフはどこか上の空でもある。

王妃の話題を出すと嫌そうではあるが、無関心や流産に関しての不愉快さだけではない何かも感じる。

はつきり言えば王妃に関心を持っている。

赦しがたい事実を、違うと思おうとしていた矢先の新たな側妃の噂だ。

実家の勢力から自分がないがしろにされることはない。そうは思っただけでも新しい側妃にランドルフの関心と愛情が移るのは我慢ならない。

自分こそが陛下に寄り添い誰よりも近くにいるのだと思っていたのに、今になって足元がぐらつく気配がする。

王妃に加えて新しい側妃など。

国王を慕うがゆえに抑えられない不愉快な思い。顔には出さないがもう無邪気なだけではいられないことをブレンダは自覚した。

夜会では誰よりも美しく装わなければ。誰よりも陛下に相応しいのは自分だと知らしめなければ。既に用意してあるドレスにまだ手が加えられないだろうか。お茶会が終わったら早急に手直しに取り掛かる。

そう考えていたブレンダは、常でないむかつきを感じた。

「陛下が新たな側妃をいうお話は本当なのでしょうか？」

エルマとジェーンとお茶を飲みながら話をふられたクリスティーナは、一瞬だけ手をとめた。

随分前からこの三人でお茶というのも習慣になっていた。以前は

エルマだけだったのが、ジェーンも加わり主従の垣根を越えたものになっている。

変わったことといえば他にもある。ブレンダに情報を流していた侍女はエルマとジェーンが選んだ新しい侍女に代わり、近衛は孤児院に同行するたびになんとはなくの親しみも加わって、王妃の間は氷の王妃に似つかわしくない和やかな空気に包まれていた。

ジェーンは若い娘らしく、新しい側妃の噂が気になって仕方がないらしい。

「事実であつても不思議ではないわ」

クリステイーナは淡々と言う。エルマは何も言わない。ジェーンはそれでいいんですかと言わんばかりの顔つきだ。

そんな二人にクリステイーナは少しだけ困った口調になる。

「仕方ないでしょう？ お世継ぎは必要なのだし」

年の離れた王弟や王妹はいるが、ランドルフに世継ぎが必要なのは当たり前の話で。むしろ今までの側妃が一人きりという事態が異常なのだ。

「王妃様はそれでよろしいんですか？」

「ジェーン、顔が怖いわ」

クリステイーナにたしなめられて慌てて頬に手をやるジェーンが可愛く、クリステイーナも頬を緩める。

子供達に影響されてか、城の外の空気がのびのびしているからか、クリステイーナの凍り付いて動かないのではないかと思われた無表情も最近では緩みがちだ。ジェーンなどクリステイーナの、どうにか微笑みとよべるものを目撃した日には、目と口をまん丸にしてい

つまでもそのままだった程だ。

冷静沈着を旨とする近衛も動きが止まったほどだったので、氷の王妃の微笑みにはなかなかの破壊力があるらしい。

それでも最近は慣れてきて、密かにそんな表情が見られるのが誇りであったり自慢であったりもするらしかった。

「状況を見れば当然の成り行きでしょう」

「状況云々ではなくて王妃様のお気持ちです」

「ジェーン、わきまえなさい」

エルマからの叱責に口をつぐむジェーンだが、目は雄弁に物語る。クリステイーナはそれを受け流した。長年の無表情は何を考えているのか分からないと不気味さを煽るほどに完成されていて、感情を読取らせない。クリステイーナがこの表情になると決して本心を明かすつもりがないのをジェーンも知っていて、追求を諦めた。代わりに自分の職務を全うすることに決めたらしかった。

「王妃様、式典と夜会のドレスの仕上がりはいかがですか？ 改善をご希望する点などございますか？」

「いいえ、とても素晴らしいできだと感心しているの。良くやってくれたわ」

クリステイーナから褒められて、ジェーンはぱあつと顔を輝かせた。王妃の周囲の空気をあたたかいものに変えたのに、間違いなくジェーンも一役買っている。

エルマは良い方向に変わりつつある主人を見ながらそう思う。自分しか味方がいなかった頃からすれば、まず周囲から、そして慈善事業に関心のある貴族達にと確実に王妃の影響力が及びつつある。

元から王妃としての資質は申し分ない。少しだけ氷の壁がとけたようにも思えて、そうと知った人の関心を集める。

この期に及んでクリスティーナと交流を持つ貴族はよほどの野心家か、独自の信念や価値観を持ち信頼に足る人物だ。人となりを見極めて情報と組み合わせる中から『本物』を選び出す。

主が変わろうとしているのなら、協力する。悲しいきっかけから始まったことでも、うすうすこの先の主の意向も察してはいてもだ。誰よりも誇り高く、誇りにしがみつかなければ生きてこれなかった主の姿は物悲しい。想いの大きさを自覚していない様子ももどかしい。

できるのはただ主の背後を守り、思う生き方のために全力を尽くすこと。長年クリスティーナの母でもあり、姉でも友でもあったエルマは、今度の式典に波乱の予兆を感じていた。

昼間新しい側妃の話が持ち上がったせいも、眠れずにクリスティーナは寝台を抜け出してバルコニーへと出た。風は冷たいが気持ちが良い。澄んだ空気に星がよく見える。

しばらくそうして立っていたクリスティーナは、背後からの足音に振り返った。いたのは夜着に暖かそうなガウンを重ねたランドルフだった。

「陛下」

「星がきれいだな。そなたはそんな薄着で寒くないのか？」

「寒さには慣れておりますので」

「そうか。だが、随分と冷えているではないか」

頬に当てられた手の温もりに、クリスティーナは疼くような想いを抱く。ずっと与えらなかつた温もりはランドルフが手を引けば、一層のわびしさを伴う。

「風もでてきた。中に入ろう」

背中に手を添えられて素直に寝室へと戻りかけ、クリスティーナは吐き出し窓のところで足を止める。

「それではお休みなさいませ」

「体が冷えたので、何かだしてくれないか？」

別れてそれぞれの寝室へ戻るとばかり思っていたのに、意外な要求にクリスティーナはランドルフを見上げた。

先に自分の寝室にランドルフを通して、飾り棚からグラスと酒を取り出す。生国の酒は度数が高く、少量なら寝酒としてもいい。長椅子に座ったランドルフのグラスに酒を注ぎ手渡した。

毒見も兼ねてクリスティーナが先に飲む。ランドルフもグラスを口に運んだ。

「美味しい」

「ありがとうございます」

酒肴はさすがにないので、急に酔わないように少しずつ飲んでいくクリスティーナをランドルフはじつと見つめていた。

その視線に何か含まれているように思えてクリスティーナは何か、と小首をかしげた。

「そなたは笑いも泣きもしないが、どうしてなのだ？」

ランドルフから何故笑わぬ、と随分昔になじられた気がする。クリスティーナに関心を失う前のことだ。

優しい陛下は政略でめとった自分を、それでも大事にしてくれた。どう応えていいか分からなかったのは自分の方だ。これまでのよう

に接していたら、いつの間にか氷の王妃とあだ名され定着してしま
った。

ランドルフが離れて行って久しいのに、この状況はなんだろうと
不思議に思える。

「泣くことも笑うことも禁じられておりました」

「誰からだ」

「父の、国王からです。わたくしは母の命とひきかえに生まれまし
た。父は母をそれは愛していたそうで、わたくしが赦せなかったの
でしょう」

ものごころ付いた頃にはもう、北の城に居場所はなかった。

たまに公務で顔を合わせても父は笑顔を向けてはくれなかった。

抱いてもくれなかった。離宮で数少ない使用人と暮らし、疎まれた
まま大きくなった。

年頃になり政略の駒としての価値を見出されるまでは。

「使用人にも父の厳しい目があつて、離れて暮らしていても泣いた
り笑ったりすると使用人が罰せられました」

何度かそんなことがあり、クリステイナは感情を手放した。

それしか生き方を知らないのだから仕方がない。ただ、ここでは
段々とそれが苦しくなり、流産で決定的になった。母親になれる。
その喜びが大きかった分だけ喪失は苦しい。おまけに役立たずにも
なってしまった。

泣きたいのに泣けない。泣かない。笑えない。それが自分だ。

淡々と言つてのけるクリステイナにランドルフはしばし言葉を
失う。

自分とて親と親密だったかと聞かれると王族の常としか答えよう

がない。ただ少なくとも疎まれたり憎まれたりはしていない。

北での日々がどれほど寒々しかったのか。氷の王妃と擲揄を含んだあだ名をびったりだと思い、クリスティーナに投げつけてきたことをランドルフは恥じた。

加えてクリスティーナが流産した時、自分はいたわりの言葉をかけるでもなく非を責めた。あの時の硝子のような眼差しが、胸をえぐる。

どちらのグラスも中身が空になり、クリスティーナは静かにグラスを置いた。

「もう遅くなりました。明日にさしつかえます」

お休みなさいませ、と頭を下げるクリスティーナをランドルフは抱きよせて、寝台へと歩をすすめる。上掛けをめくってクリスティーナを横たえた。

「陛下」

「ここで休む」

「ブレンダ様のところに」

「他の女の話はするな」

珍しく焦っているのかクリスティーナの声が上がっている。

自分の知らない顔ばかり見せる、とランドルフは新鮮にも思う。

「わたくしに関わるのは時間の無駄です」

「私の時間の価値は私が決める」

両手で頬を包み目を合わせた。薄青い瞳が、落ち着きなくさまよ

「笑って見せてくれ」

大きく見開かれた目がランドルフをとらえる。クリスティーナは笑おうとしたのだろう、口の端がひきつるように上がった。

「できません」

「そなたは不器用なのだな」

気付くまでに遠回りした。ランドルフは忍びやかに笑って唇を重ねた。

夜が明けてクリスティーナは目を覚ました。温もりは夢ではなかったようだ。欲しくてたまらなかった、それでいてどう接していいか分からなかった存在が傍らで静かに目を閉じている。

なぜ自分を構う気になったのかは分からない。昨夜の国王にとっては、ここにいるのは無駄な時間ではなかったということのようだ。不思議なほどに穏やかな心持ちで、これを幸せというのだろうか。クリスティーナはランドルフを起こさないように、じっと見つめた。記憶にとどめようとするかのような、真剣な眼差しだった。

眉間にかすかに皺をよせ、ランドルフは目覚めた。腕の中には笑うことも泣くことも忘れて久しい自分の王妃がいる。

「お早うございます」

その声が甘く聞こえるのは自惚れではないかもしれない。ランドルフのものより幾分か小さな寝室は、落ち着いた調度でまとめられていた。側妃のブレンダのような華やかさはないが、品が良く繊細な印象をかもしだしている。

寝起きで少しぼんやりしていたランドルフは、そういえばと質問した。

「そなたはなぜ寝台の端で眠ろうとするのだ」

腕の力が緩みかけると、ころりと向こう向きになって体を丸める。そんなに腕の中にいるのが嫌なのだろうかとランドルフはもやもやしたまま、強引に抱き寄せて眠りについたのだった。

クリスティーナの耳がすうっと赤くなった。

「それは、わたくしの癖です。横向きだったりうつぶせで寝ることが多くて」

共用の寝室で背中を向けられていたのを苦々しく思っていたランドルフだったが、それが単なる癖だったとしたら。

昨夜の認識ではないが、本当に遠回りしていたことになる。

「陛下、そろそろ起きなければ」

式典を明日に控えて今日は二人とも忙しいはずだ。ランドルフはクリスティーナの髪を梳いて、寝台から起き上がった。

こんなに穏やかな気持ちで朝を迎えたことはなかったように思う。

「今夜は共用の寝室にきてくれ」

耳元で囁いてからランドルフは寝室をあとにした。王妃の近衛はまさか国王が出てくるとは思わずにぎよっとしていたが、悠然と前を通り自室へと戻る。

着替えや身支度をしながら何年も経っているのに、ようやく王妃の氷の壁の内側に立ち入れたような気がした。入ってしまったえば王妃は感情の表し方を知らないがゆえに、仮面をつけるように装って自分を守る、そんな不器用な女性だった。

関心を示さないようできて、こちらの様子を気にかけている。まるで。

「猫のようだ」

侍従が独り言を発した国王をいぶかしげにうかがうが、当のランドルフは機嫌よく朝食の席についた。

クリスティーナの給仕をエルマが務めながら、注意深く主の様子を観察する。今朝、寝室から国王が出てきた際には内心で仰天した。近衛からも報告がなかったことから、国王は窓から主の寝室に入ったに違いない。

今までそんなことはなかった。二人の仲は冷え切っていて、たまに共用の寝室で過ごす程度。それも懐妊、流産からは耐えて久しかった。

クリスティーナは一見、いつもと変わりないように見える。ただエルマにはいつも以上に雰囲気が和らいでいるのが分かる。

安堵しながらも、今朝のことはすぐに側妃の耳に入るだろうと危惧していた。

何事もなければよいのだけれど。エルマは黙ってお茶を注いだ。

翌日は建国祭ということで式典が盛大に行われた。宗教関係の式典を行い、いよいよ祝賀で集まった民の前にでる時刻となる。

国王と王妃の衣装、頭には王冠と麗々しい装いでランドルフはクリスティーナに腕をさしだした。

ランドルフを見上げ、柔らかい眼差しになったクリスティーナが手をさしいれ、二人でバルコニーの端の方に進む。二人が姿を現して歓声上がる。それにしばらくゆったりと手を振って応えていた。

国王様万歳の声が多い中、今年は高いよく通る声で王妃様万歳と聞こえてきた。

声の方を向くと、孤児院の子供達が固まって手をぶんぶんとしている。子供の声はよく響く。小さな子供は大人の後ろだと埋もれてしまつて見ることができず、またぶつかられてしまう。

孤児院の年長の子供が肩車をしたり、抱き上げたりして国王と王妃を見えるようにと頑張っていた。王妃はボブが小さな子を肩車し

ているのに気付いた。小さな子が小さな手を一生懸命に振っている、可愛い光景にふと口元が緩んだ。

「可愛らしいこと」

呟きはランドルフの耳にしか入らなかった。何気なく王妃に目を向けたランドルフは絶句した。クリスティーナが笑ってた。

そのままランドルフを見上げ、子供達の方へと注意を向ける。

「陛下、あそこに孤児院の子供達が」

ランドルフは手を振るのを忘れた。視線は王妃に固定されてしま
い動かない。

まばたきすら忘れたように凝視され、クリスティーナは居心地の
悪い思いをした。

「あ、の、陛下？ お手が」

「あ、あ」

我に返ってランドルフは手を振った。横目でうかがう王妃は微笑
している。

子供達と目を合わせて手を振っている様子に、人形の名残はどこ
にもなかった。

終了時刻になり、二人はバルコニーから室内へと戻った。窓越し
にまだ歓声とざわめきが聞こえている。お茶が出され、しばしの休
息に室内にほっとした空気が漂う。

「そなた、笑っていたな」

ランドルフが指摘するとクリスティーナは言われて初めて気付い

たかのように、口元に手を当てた。

「笑っていましたか？」

「笑っていた。私は初めて見たように思う」

「顔が引きつっていませんでしたか？」

少しの困惑と羞恥が垣間見える。無表情とばかり思っていた王妃が、実はかなりの表情を乏しいながら隠し持っていた。

それに気付いて優越感と共に独占欲も生じる。

他の者にはあまり見せたくない。自分だけが発見した秘密の場所や宝物を隠す心理に似ているかもしれない。

「引きつってなどいなかった。夜会にはそなたの国から兄上がやってくるだろう」

「まあ、ずっと顔を合わせていませんでしたので楽しみです」

また、王妃が変わった。『嬉しい』や『楽しみ』などの感情を示す単語がずりりと出るようになった。直前で切られると取り付く島がないが、楽しみですと続けられると共感しやすい。

孤児院で人として生きる力がほしい、子供達から学んでいると言っていたのが身に付いたというところか。

別の意味で危ないが。

ランドルフは落ち着けと時間をかけてお茶を飲み干した。

招待客との昼食やお茶会を挟んで午後時間は過ぎていき、いよいよ夜会が始まるうとしていた。

クリスティーナの王妃の間ではエルマとジェーンが最後の仕上げをしている。複雑に結い上げた髪の毛に、王冠の中央にはめこまれた宝石とそろいの耳飾り。ドレスは首元と腕を繊細なレースが覆っ

ている。

「どうかしら」

「お綺麗です」

エルマは満足そうに頷き、ジェーンはいい仕事をしたといわんばかりに感激している。

クリステイーナも鏡で自分の姿を確認する。

ありがとうと感謝の念を述べて、夜会の広間へと移動を始めた。昨夜から、いやー昨日から夢のようだ。ランドルフの目には慈しみと熱があつて、それが自分に向けられている。今までのような無関心か、氷の王妃と冷ややかによこされる目線とは明らかに違う。

何年もここにいたのに、ようやく居場所が定まったような気がした。ここにいてもいいのだろうか、からここにいたいと思えるようになった。

胸があたたかい。手足も冷たさで凍えて縮こまることもない。

広間へ向かうクリステイーナの足取りは軽やかだった。

側妃の部屋では戦争のような騒ぎだった。

「これじゃないわ。あの髪飾りにして。花はこちら。口紅の色も合わせて」

ブレンドの次々におこる細々とした要求に、侍女が忙しく立ち働

きつい口調になるのは夜会の時間が迫っているからで、けし
て二晩続けて王妃のところへ渡った話を聞いたせいではない。

ブレンドは誰よりも美しく豪華に装うことに腐心した。衣装も何
着か作らせていたものに手を加えて宝石を縫いつけ、宝飾品も城に

宝石商をよびつけて実家の財力にものを言わせて買いあさった。

念入りに化粧を施し、ブレンダは鏡の中の自分に満足する。

ドレスも宝飾品も誰にも負けない。ドレスに合わせた靴を履く。踵を高くして足を長くみせる効果を狙う。踵は高くなければドレスを引きずってしまふ。

鏡の中で角度を変えながら、おかしなところがないかと調べる。

自分でも満足し、侍女からも賞賛をうけてブレンダは立ち上がった。その姿は華と呼んでさしつかえないほど美しいものだった。瞳は異様な輝きを帯びているし、興奮をあらわして頬は上気している。これなら、と思う。陛下のお心をとらえるに違いない。

それに切り札もある。もう他に陛下の関心がいくはずもない。今夜の夜会の主役になるのは自分だ。

仕上げに振りかけた香水に、やや気分を害しながらブレンダは歩き始めた。

ランドルフは扉の前に立って自分を待つ王妃に感嘆を禁じえなかった。

式典の衣装も清楚で日差しに映えるものだったが、夜会の衣装はレースで覆われた首と腕が一段とほっそりと見せて優美だ。手を差し出しながら素直に賞賛する。

「綺麗だ」

「ありがとうございます。陛下も、ご立派です」

重ねられた手に力を入れる。二人ともに前を向く。

扉の向こうが静まり返った。重厚な扉が開かれて国王と王妃はきらびやかな明かりと人いきれの中へと漕ぎ出していった。

出席者が注目する中ゆつくりと所定の位置についた国王は、静かになった人々の前で会の開催を宣言する。あいさつが終わり、玉座に腰掛けて飲み物を手にする。華やかな夜会に相応しく大人数が収容できる広間は、すぐに楽しそうにさざめく人で賑やかになった。

ランドルフはクリスティーナに飲み物を手渡して、背中を玉座の背に預けた。クリスティーナは飲み物を片手に夜会の様子を眺めている。張り詰めた空気ではなく、自然にそこに溶け込むような雰囲気だ。

笑顔ではないが、口元はこころもち上がっている。レースに透けた肌がいささか目の毒に思えた。

「国王陛下、本日はお招きいただきありがとうございます。一層の発展を心より願い、祝いの言葉とさせていただきます」

「わざわざありがとうございます。お久しぶりです。国王陛下はご健勝でしょうか」

建国記念の祝賀を述べにきたのはクリスティーナの兄で、隣国の王太子だ。

良く似た薄い色の金髪と青い瞳も持っている。顔立ちも整ってはいるが、さすがに男の顔だ。兄妹が並んでいると似合いの一对に見える。

穏やかな表情で王太子が妹に顔を向けた。

「クリスティーナ。体の調子はどうか？」

「ありがとうございます。もうすっかり本調子です」

柔らかなく微笑んだクリスティーナに王太子は驚いている。しばらく

くそのまま、驚いた、と詰めていた息を吐いた。

「……ティーナ。お前の笑顔が見られるなんて。いつ以来だ？」

「わたくしも忘れてしまいました、お兄様」

王太子の顔に一瞬だけ痛ましいものがよぎったように思えたが、すぐに笑顔に取って代わった。

王太子はランドルフに好意的な口調で話しかける。

「……妹が幸せそうで安心いたしました」

父親である国王から笑顔を禁じられたことを知っているランドルフは、かすかに頷くに留めた。さっきのやりとりではもうずっとクリスティーナは笑っていなかったようだ。生まれを疎まれて育った寂しさはどれほどだったのだろうかと思えば、今の笑顔が貴重だ。

王太子は翌日にとクリスティーナと約束をして、他国の高官との歓談に加わった。

父親に代わり実務にも携わっているらしい将来の国王は、自負があるらしく顔売り他国と繋がりを持つとうとしている。代替わりしても良い関係が築けそうだとランドルフは判断した。

クリスティーナもランドルフから離れて、人に囲まれている。

どんな噂が流れたのか、国王との仲がかつてないほどに良いらしいと察した人が群れてくる。今更と心中では醒めてはいいるが、おくびにも出さずに会話を続ける。ここから擦り寄ってきた貴族を引いて、真摯な見舞いを寄せてくれたり慈善活動に熱心な貴族を残すと、ようやく信頼に足る少数になると計算する。

孤児院の子供を引き取ってくれた伯爵夫人と、可愛い盛りの子供の話をしながらさりげなく広間の様子もつかう。

国外の招待客は宰相や国内有力貴族、そして国外の者同士で飲み

物を手に話　議論の域に達しているようでもあるが　に花が咲いているようで。

令嬢方も仲の良い者で固まって、あれこれと噂話に盛り上がっている。

側妃のブレンダは取り巻きに囲まれていた。一番華やかな集団かもしれない。化粧と香水の香りがここまで漂ってきそうな気がする。ブレンダは上機嫌で軽やかな笑い声を上げていた。

陛下のここ二晩の行動は気にならないというのか。クリステイナはかすかな違和感を抱く。

ひたすらにランドルフの関心を求めていると分析していたブレンダが、別の女、しかも王妃である自分のところで夜を過ごしたことに平気であるとは思えない。

取り巻きの令嬢達から冷やややかな目で見られたり、ブレンダ自身からも何らかの反応があるかと覚悟していたのにどうも違う。自分のことなどどうでもいいような、いや、ある種の哀れみをもった寛容さでも表現すべき視線を感じる。

もう目障りと思われなくなったのか。もしくはと、クリステイナはかすかな不安を覚えた。

ひとしきりの歓談の後ではダンスが始まる。最初はランドルフとクリステイナが踊る。周囲には厳選された数組も配置されて、向かい合わせになり音楽がかかるのを待つ。

手と腰にランドルフの温もりを感じて、鼓動が高まる。ダンスなら何度も踊ったはずなのに緊張している。きつとランドルフが自分を優しく見ているせいだ。婚姻当初の儀礼を含んだ優しさや、関係が冷えてからの何の感慨もない義務感からの視線と違うからだろう。緊張しているはずなのに、指先まで熱を帯びている。

くつと手を握られたかと思ったら、ダンスが始まった。

ランドルフのリードでクリスティーナが踊る。身をひるがえすたびに腰からすんとしたラインをつくり、後ろだけ裾を長めにしてあるドレスが優美な曲線を作る。薔薇のように広がるのはなく百合のようにすっとした意匠のドレスはクリスティーナに良く似合い、ダンスで別の印象をもたせる。

「楽しんでいるか？」

「はい」

顔をよせてランドルフが密やかに尋ねる、傍目からはいかにも親密そうな光景だろう。

クリスティーナは微笑でランドルフに応えた。顔がひきつることもなく、ランドルフには自然に笑えるようになってるのが思いがけないながらも素直に嬉しい。対するランドルフもクリスティーナしか目に入らないかのように振舞う。

最初で最高のダンスだった。

曲が終わるとすぐに新たな曲がかかり、次からは思い思いに踊ります。一気に賑やかに、華やかになった。

玉座に戻って飲み物を口にし、クリスティーナはほっとする。

夜会を楽しんだのは初めてかもしれない。田舎者と思われ、次は愛想のない氷の王妃とあだ名されて夜会はただ時間が過ぎ去るのを待つだけのものだった。

それでも出席は義務であり、ここでしかわからないことを知る思惑もあって顔を出していた。交友関係、今関心を集めている話題、城内の勢力図、出席する貴族の衣装から察せられる経済状況など。

こちらが何についても無表情で関心を示さないとすれば、置物のように思っ舌の軽くなる人々。上品な裏で毒を吐く人々。

ものを見る目があり、聞く耳があり、考える頭があれば軽率としか判断できないことを笑いながら口にする場にいきあうのもたびた

びだ。

国王の関心を失った、お飾りの王妃。

その状況が辛くないわけではなかったが、利用していたのも確かだ。

今はそれが覆されている。国王の関心が再び寄せられたのを目の当たりにしてどう変わっていくのだろう。

そんな夢想はブレンダによって破られた。

玉座に戻ったランドルフに裾さばきも軽やかにブレンダが近寄る。クリステイーナは圧倒された。全身を一種異様な雰囲気覆っている。興奮しているといってもいい。

大胆に肩と胸元をあけてレースとフリルと宝石で飾り立てている。化粧もやや濃い目で頬紅など不要なほどに紅潮していた。

「陛下、ご報告がありますの」

「どうした、ブレンダ。私に報告とはなんだ？」

声すら弾んでいる。ブレンダが口を開く前にちらりと自分を見た気がして、クリステイーナは肘掛に乗せていた手に力が入る。ブレンダはそれきりクリステイーナなどいないかのように、ランドルフに熱のこもった顔を向けた。

「私、身ごもりました」

高らかな声はちょうど音楽の途切れた広間に響いた。玉座の近くにいた人の声が一斉に止んだ。異変に人々もおしゃべりを控え、注目が集まる。

ランドルフは沈黙した。様々な考えが一瞬のうちに身内を巡る。次に声を出した時は冷静だった。

「それはまことか？」

「ええ、間違いありません」

「侍医が診察を？」

「診断するには早すぎるといわれましたが、つわりもありませんし、なにより」

自覚症状と女性特有の他覚症状が揃っている。ブレンダはただただ自分の幸福に酔って、晴れがましい顔つきだった。

戸惑いを隠すランドルフと、強張りを隠すクリスティーナには気付く様子もない。

「おめでとうございます、ブレンダ様。どうぞ健やかに過ごしてください」

沈黙を破ったのは王妃の凜とした声だった。

「ありがとうございます、王妃様。少し辛いので座ってもよろしいでしょうか」

慌てて椅子が運ばれてブレンダは一段低いながら国王の近くに座った。

誰が見ても明らかだった。興奮した面持ちの父親の侯爵が娘に駆け寄らんばかりに近寄って両手を握り締める。国王からも声をかけられ、涙が光りさえしていた。

たちまちにブレンダには貴族達から祝いの言葉が降り注がれた。これでブレンダが男子を産めば、次の国王の母になるだろう。

乗り遅れてはいけない、ブレンダの、父の侯爵の関心を買わなく

てはいけない。

ランドルフは肘掛に肘をついて頬杖でいる。クリスティーナはその様子を見ている、その顔には何の表情も浮かんでいなかった。クリスティーナにランドルフが声をかけようとした時、クリスティーナに手が差し伸べられた。

「踊ろうか、クリスティーナ」
「お兄様」

兄である王太子がクリスティーナを誘い出し、狂騒の群れから離れるように広間の中央へといざなう。緩やかな曲にあわせてゆつたりと踊りだす。

しばらく優雅に踊っていたが、人に聞こえないように会話を始めた。

「お前、大丈夫か？」
「ええ、お兄様。陛下にとっても喜ばしいことですもの」
「お前にとつてはどうだ？ 書簡にはその、お前が……」
「……ええ。わたくしには今後は子供は難しいだろうと言われまして」

では、と王太子は人に囲まれて姿の見えない側妃を見やった。あの側妃が中心になるのは間違いない。

もともと国力に差のある国同士の政略でなされた婚姻。側妃の父親は国内でも有力な侯爵位。側妃は彼女一人でそれが懐妊したとなれば、影の薄い妹はますます冷遇されるだろう。

妹は何も言わないが隣国の事情だ。少し調べれば国王との関係が冷えていたことくらい容易に判明する。懐妊に安堵したのも束の間で残念な結果になった報告をされて、どれほど落胆したことか。

「お父様は何と？」

「あの人は、分かっているだろう、クリステイーナ」

「そうですね」

ともに王妃の子である王太子とクリステイーナ。王妃の死で国王は心を閉ざした。王太子はそれでも世継ぎであり、親密でなくともそれが普通の父と息子、国王と王太子としての関係を保った。

クリステイーナは誕生すら疎まれて離宮で育った。時折の書簡と都合をつけての訪問ができる精一杯であった王太子にとって、クリステイーナは不憫な妹で気がかりな存在だ。

辛いことのある後だけに今回の対面も心配していたのに、一層美しくなっただけにより笑顔が戻っていた。国王との絆も感じられてそれを喜んだばかりだったのに。

「それよりもお兄様。今後が問題です」

「そうだな」

小国の二人は冷静に今後を分析する。側妃の懐妊で勢力図は変わる。次にくるのはおそらく。

「書簡で依頼した件とあわせて明日、話し合いますよ」

「承知した。それにしてもお前は強いな。あの時点でここまで見越していたのか？」

「時期は読めませんでした。予想はしていませんでしたので」

氷の王妃をよろうのに、欠かせなかったのが情報だ。誰の悪意が実際に危険か、身を守るための武器になるものが何か。エルマを通じて情報を集めそれを分析して備える。

ここまでは予想通り。予想外だったのがランドルフだ。

今更というべきか心が通じてしまった。それとも最後に誰かが哀れんでくれた、ほうびのようなものだったのだろうか。ステップは迷わないのに、心だけ惑ってゆらゆらしている。

再び玉座に戻ったクリスティーナにランドルフは何か言いたげだった。

いたわりと、当惑など目線だけで問いかけてくる。クリスティーナは微笑んだ。

ただブレンダの足元に気付くとすつと表情が冷たくなる。つられてランドルフもそちらに目を向けた。裾をさばいた拍子のブレンダの靴の踵は高かった。

「ブレンダ、その靴はどういうことだ」

「え、あ。申し訳ございません、陛下。考えが足りませんでした。でも私、気をつけます。王妃様のように……」

「ブレンダ」

叱責されてブレンダが身をすくめた。ただランドルフはこれ以上言わせるつもりもなかった。ここでブレンダが発言すると王妃が踵の高い靴を履いていた、と既成事実になってしまう。

今の状況でその発言がなされるのはまずすぎる。

加えてブレンダの配慮のなさにも呆れる思いだった。発表の場にしても靴のことについても、何よりクリスティーナの立場をなくそうとするような……そこまで考えてはつとずる。

ランドルフは齒噛みする思いだった。無邪気で可愛らしいとばかり思っていたブレンダが、もしや……。

宰相に依頼した件は一層秘密裏に、そして徹底的に行うと決意した。調査の範囲を広げる必要も感じた。

夜会が終わり自室に引き上げる際、ランドルフはクリスティーナを伴った。

長い廊下を無言で進む。二人の間には重苦しい問題が影を投げている。

「私の王妃はそなただ、クリスティーナ」

低い、決然とした声でランドルフは告げた。
クリスティーナが足を止める。

「ありがとうございます……ランドルフ」

かすかに笑ってクリスティーナは自室へと消えた。
ランドルフは今夜は眠れるだろうかと自信がなかった。

ドレスを着替え、化粧を落としクリスティーナはエルマと二人になる。

「ブレンダ様が懐妊されたわ、エルマ」

「王妃様、それでは」

「そう、一層身边には注意が必要。明日お兄様がいらっしやるから例の件についても話を詰めようと思うの」

エルマはしばらく黙ったあとで確認するかのように尋ねる。

「それでよろしいのですか？ 陛下は悪いようにはなさらないでしように」

「陛下を苦しめたくないの。板ばさみなんてことにはさせられないでしように……」

それに、とクリスティーナは続けた。

「お飾りであっても王妃は王妃。それにわたくしは元王女でもあるの。今となってはそれしか価値はないけれど」

最後にいい思いができたと考えれば悪くないでしょう？

エルマは何も言えずに頭を下げた。

翌日王太子である兄のデレクとクリステイナ、エルマも加わって話し合いがもたれた。皆一様に固い顔つきだった。デレクはクリステイナがうつすらと隈を作っているのに気付いた。

一夜明けて城内は側妃の懐妊の話で持ちきりだ。人払いをしているはずのこの部屋まで、落ち着かない空気を感ずる。

「……テイナ、これでいいのか？」

「デレク兄様、国には益となりましょう。こちらから動くわけではありませんから」

デレクは腕組みをして、クリステイナの『提案』を検討する。王妃の流産の後での側妃の懐妊。これが国へどう影響するかは明白だ。父の国王が表立っては動かないだろうことも、妹の立場を苦しめる。国益を考えれば一応の擁護はするだろうか。

格上といえる国に輿入れしたのに確固たる成果をあげられなかった妹に対して、父王の心情は冷ややかであろうと思われる。

この国でも国元でも苦境に立たされる。クリステイナはそれを見据えて打開策を講じようとしている。冷静な判断は、空恐ろしいほどだ。

「側妃のブレンダ様と実家の侯爵家の意向は、明白です。問題はそれを実現する気があるか、あるならどの程度まで実力行使をするかでしょう」

「お前は同盟の証でもあるのだ」

「それでもわたくしは邪魔者でしょう」

淡々と自分を評価する様に、デレクはエルマと目配せをかわし同

じ思いだろうと確信した。どうして卑下していると感じるほどに自己評価が低いのか。冷静な物言いは皮肉にも氷の王妃のあだ名に相応しい。

こちらから動くことはしない、そう言いながらも自衛はしていない。エルマが毒見の強化を指示し、不用意な外出は避けて警備も厚くするようにと近衛に申し入れたようだ。今まで以上に贈り物にも神経質になっている。

側妃の懐妊の後で王妃の交代があるのではないかと囁かれている。流産した小国の王妃よりも、自国の侯爵令嬢 将来の世継ぎの母の可能性が高い女性の方がと、水面下での話がここに来て半ば公然と語られている。

国民感情としても側妃の子供が王位につくよりも、王妃の子供としての方がより王権の正統性が感じられるだろう。

そんな意向を背景にいつ王妃下ろしが本格化するか分かったものではない。クリスティーナはランドルフの言葉を思い返す。

私の王妃はそなただ。

言い切ったランドルフの力強さは頼もしかった。ランドルフ本人は、自分を廃するつもりはないようだ。

ただ国内貴族の意向を突っぱねられるかとなると別問題だ。貴族間で根回しをした上で、宰相や国王陛下に迫ることだろう。ランドルフとて自分の子供の出自は高いほうがいいに決まっている。

水面下で非公式に働きかけるのなら時間はかかるだろうから対策も講じられる。これが実力行使に出られると厄介なことこの上ない。出産まで期限があると考えたと、後者が選択される可能性が高い。表向きは話し合いで、裏では排斥に動くことも充分に予想される。

「しばらく孤児院にはお出ましにならないほうが……」

エルマが進退する。クリスティーナはテーブルに肘をつき、両手を組み合わせた上に顎を埋めるように乗せている。考え事をする時のクリスティーナの癖だ。

「わたくしだけなら、引きこもればすむけれど」

とりあえず口に入れるものに気をつければよい。城内で最も警備が厳重なはずの王妃が襲われる事態は、よほどのことがない限りおこりにくい。

怖いのは弱点を攻撃される、または口実に脅されることだ。

「いつそしばらく孤児院に泊り込もうかしら」

冗談めかすとデレクとエルマも緊張を和らげる。冗談ではなく孤児院の警備を宰相あたりに依頼しなくてはならない、とクリスティーナは思う。

ただ年長の子供達は仕事や買い物に出かけることが多いので、個々に警備をつけるといふのは実際的ではない。せいぜい街の警備隊の巡回の強化程度だろう。孤児院の子供達に危害を加えられては、と頭が痛い。

「王妃の後援する孤児院の襲撃など、国の威信に関わると思っけれど」

「火事でも迷子でも、事故や災害なら可能だ。ティーナ」

常に最悪を想定しろ。デレクの冷徹な言葉は、しかし本質を突いている。

ふう、と重い溜息が漏れる。実力行使の前に侯爵なり、代理人なりが『話し合い』に来るだろう。

「ではお前が考えている状況になったとしてだ」

デレクは地図を取り出した。生国とこの国が描かれた地図には赤と黒で印が付けられている。

三人は顔をよせてことさら小声になった。

「黒が婚姻の時点に明らかだったもの。赤がその後の調査で判明したものだ」

「デレク兄様、ここもですか？」

「ああ、ここはかなり有望らしい」

クリスティーナの指がある地名を示す。デレクは頷いた。

「お前の目論見どおりなら、相当な利益を生むはずだ」

だが、とデレクは顔を上げ、自分とよく似た薄青い瞳を覗きこむ。そこにあるのは妹を案じる兄だった。

「お前が犠牲になることはないのだ、ティーナ。ここが嫌なら」

今までにも気遣いを見せてくれた兄に、クリスティーナは感謝の念を持つ。今も先行きの暗い自分を心配してくれている。

生国に戻っても自分に居場所も利用価値もあるとは思えない。自業自得とはいえ不名誉なあだ名を冠し、流産して子供が望めないだろつと宣告された女など。

階段から落ちた時、クリスティーナは自分の未来を悟った。何もせずにその日を待つか、少しでも有利になるようにあがくか。クリスティーナは後者を選び、目的を定めて動き出した。

「もう少し時間があればとは思ったのですが」

孤児院の改革も経営もやっと走り始めた状況だ。問題点を洗い出して改善する、その繰り返しをする時間は残念ながらあまりにも短い。

クリスティーナの誤算の一つはブレンダの懐妊が思ったよりも早かったことだ。

もう一つの誤算は、ランドルフ。

クリスティーナは組んだ手をテーブルに置いた。

冷たい間柄のままだったら、何の感慨もなく計画を実行できていたはずだったのに。本当に皮肉だと自嘲したクリスティーナは、心配そうな二人に微笑んで見せた。

「そんな顔はなさらないで。わたくしなりに考えたことなのですから」

ブレンダの部屋は贈り物で埋まりそうだった。夜会で懐妊を報告したものだから、一斉に話が伝わって引きも切らずに祝賀が寄せられている。

筆頭というべきは父親の侯爵で、既に子供服や玩具などを用意していた。願望が入っているのか男の子の色目のものだ。

王妃からも祝いの書簡とともに、履き心地のよさそうな自作の室内履きが贈られていたが、縁起が悪いの一言でブレンダの目に触れることなく処分された。払い下げられたと下働きの者が所持しているのを知ったジェーンの悔しがりようはなかった。

「縁起、ね」

クリスティーナが一言で済ませたのに、ジェーンは自分のことの

ように悔しがった。

主があなどられたのもそうだし、城の空気がブレンダになびいていることへの不安や不満もあるのだろう。

「そんな顔はここだけになさいね」

クリステイーナにやんわりと注意されて、ジェーンも気を取り直す。ジェーンが不満顔をしていれば、王妃がやっかんでいると受け取られてしまう。

こんな時だからしつかりと勤めなければ。外出を控えてこもりがちな気分を明るくするために、綺麗な布や糸をもちこんで手芸に時間を費やした。慣れるとおしゃべりしながらも手は動く。うつつの作業でもあった。

孤児院で売ってもらったために刺繍を施しながら、ジェーンの語る城内のあれこれをクリステイーナは興味深く聞いた。

一針一針に想いをこめて模様を紡ぐ。残り時間と競争するかのよう。

数日後、クリステイーナはある伯爵から面会の申し入れをされて、それを受けた。

ランドルフはデレクの相手をして、両国間の現状確認や問題となりそうな事案の協議などを済ませた。一段落して、世間話のような流れになった時にデレクが切り出した。

「妹の処遇はどうなるでしょうか」

「処遇も何も、変わりようがないが」

何を言い出すのかとランドルフはデレクの顔に顔を向ける。妹に良く似た顔立ちに、色彩を持つ王太子は真面目だ。真剣な眼差しを向けている。

「それで国内の方々は納得しているのか疑問なのです」

率直な言葉にランドルフは詰まる。夜会でのブレンダの発言は、各方面に波紋を広げている。素直に次世代が増えることを歓迎して懐妊を喜ぶ者、侯爵令嬢の側妃の懐妊を歓迎する者、何より王妃を疑問視する者。

ランドルフとて城内の空気は承知している。王妃の懐妊が公表された時よりも、はるかに素早く大量の祝賀が寄せられているのがい例だ。周辺国との関係が安定している現状、貴族の目は国内事情に向きがちだ。

てっとり早く勢力を拡大する方法が、王家に入り込むこと。男性であれば家名を背景にした上で実力で、女性であれば容貌と才覚でブレンダが今後得るだろう勢力と影響力は計り知れないと、群れる人々は側妃を持ち上げて王妃を落とす。

「元から小国出身として、またあれの性格からも、こちらで諸手を

あげて歓迎されてるわけではないのは承知していました」

デレクは静かに切り出す。物の言い方もクリスティーナに似ている、とランドルフは思う。自己抑制に長けて現状の認識をした上で話を持っていくこうとする。

この話し合いの行方はあまり愉快なものではなさそうだと漠然とした予感を持ちつつ、まずは牽制する。

「否定はしないが、仮にも一国の王女を同盟の上でめとったのだ。おろそかにはしない」

「陛下のご厚情はありがたい話ですが、それで済むとは思えないのです」

「陛下ではなく、ランドルフと呼んではもらえないだろうか。貴殿は私の義理の兄上なのだから」

「では、ランドルフ殿。妹を排斥しようとする流れがあるのはご存知でしょうか」

ランドルフは表情には出さなかったが、周囲に硬質な雰囲気をもたらす。同席している宰相も落ち着いてはいるが隙なく国王と王太子を見比べている。

デレクは妹を思い浮かべながらランドルフと対峙する。

将来は自分も国王になるとはいえ、国土の大きさは歴然としていて属領になつていないだけましな程度の状態。隷属を免れたのはひとえに歴史だけはあること、対価となるような鉱物資源が産出されたからにすぎない。

寒冷な気候のために農作物の増産は望めない、なれば鉱工業での発展を目指すしかない。資源の輸出にも、加工技術にもこの国を頼らざるを得ない。以前よりは依存の度合いが軽くなつたとはいえ、だ。

同盟の証として、ほとんど貢がれるように婚姻を結んだ妹の行く

末はお世辞にも明るくない。

「私は妹を引き取ってもよいと考えております」

「それは国元の国王陛下の考えとしてよいのか？」

ほとんど唸るような声でランドルフが問いました。表には出ずまいと努力はしたが、手に力を入れていないとテーブルを力任せに叩いてしまいそうな衝動が駆け巡る。

デレクはそんなランドルフを見やり、静かにお茶を口に運んだ。

「父は国益にかなうのであれば何も言いません。現在は病がちでもありますので、実務の大半は私が担っています」

「王妃を貴国へと戻すのが、どう国益にかなうのだ」

「少なくとも貴国の国内安定には寄与するでしょう」

それだけでも恩を売ることになる　デレクはそう匂わせた。

「私が王妃と側妃の問題ひとつ御せない情弱な国王と言いたいのか？」

「いいえ。私はひとえに妹の安全を確保したいのです」

薄青い瞳をまっすぐに向けられてランドルフはたじろいだ。まるでクリスティーナに言われているような気がした。ただこの言い分は受け入れるわけにはいかない。

「王妃が危険なはずはない。どこよりも厳重な警備で守られているはずだ」

「そうですか」

それは肯定にも疑問にも聞こえた。

デレクはクリステイナが口にしなかつた事柄を、エルマを通じて知っている。中にはクリステイナ本人すら気づかない、未然に防がれた事柄もだ。懐妊の直後からひどくなり、そして側妃の懐妊でまた不穏になっていることも。

確かに警備は厳重だが、執拗に狙われればほんのちょっとした隙を突かれてしまうかもしれない。

むぎむぎ失いたくはない。

ランドルフもデレクの裏に含んだ意図を受け取った。

肯定すると国の威信に関わる。否定するには 階段の件がある。あれが故意に引き起こされたことならば、両国間の関係を含めて最悪の事態を引き起こしかねない。

薄く額に浮いた汗をぬぐおうと、ランドルフはハンカチを取り出した。それにデレクが目を止める。

「それは……」

「ああ、王妃が贈ってくれたもので、必ずこの花が刺繍されている。封蝋の印もこの花だったと記憶しているが」

「そうですね、ティーナがこの花をランドルフ殿に……」

意味ありげに頷くデレクは『義弟』に優しげな眼差しを注いだ。

ランドルフは首をかしげる。この花に意味があるのだろうか。デレクは内緒です、と前置きしたうえでランドルフに伝える。聞き終えて少しだけ赤面したランドルフは、そそくさとハンカチを懐にしまった。

打って変わって真摯にランドルフは宣言する。

「私は王妃を、妹君を守るつもりでいる。よく含みおいていただき
たい」

「……妹はあなたに嫁いで幸せだったのでしょね」

過去はどうあれ、夜会の時までには理想的な間柄にも見えた。それがもっと早くであればとデレクは苦くこみあげる思いを封じた。

王妃の硝子玉のような薄青い瞳に、伯爵は汗を滲ませた。小国出身の小娘と侮っているのに、妙な威圧感を感じる。まるで人外のなにかを相手にしているような、人形に話しかけているような。

「結論付けるとどういうことですか？」

平坦な口調なのに、ひやりとする。何故圧倒されるのだろうか、理解できない。

「……王妃様におかれましては、いささか体調がお悪いのではないかと」

「まあ、知りませんでした。わたくし、体調が悪いんですか？」

ほっそりとした小首をかしげて、クリスティーナは伯爵に質問返しをする。

腹心だという侍女のほかには人払いをしてある王妃の居間は、居心地がよいはずなのに伯爵は汗が抑えられない。この説得に自身の栄達がかかっている。その緊張と、間近にした王妃がなぜか予想した反応を返さない不安。

伯爵はふいに自分が歩いているのが、広く平坦な道ではなく足元の危うい崖の道であるような気がした。王妃と侍女から感じる、冷気は何なのだろう。

「気鬱がたまっていらいっしやるのではないかと、もっぱらの評判でございます」

「それで転地療養を勧めてくださるといふ訳なのです。ご親切なこと。どちらが候補地にあがっているのですか？」

「南に良い保養地がございます」

瞬間、伯爵は薄青い瞳に射すくめられた。王妃はゆったりと座っているだけだ。なのに迫力が感じられる。小国であっても王女で、お飾りであっても王妃である、王族が発する威厳なのかもしれない。つた。

「わたくしは北の出身ですから、南よりも北の方が療養としては適しているのではと考えます」

「北、ですか」

「持参金がわりにした領地もありますれば」

この国と隣接する小さな領地。王妃が育ったという離宮を含む北のやせた土地は、持参金の目録に加えられた時も貴族たちの失笑を買った。

伯爵は王妃が正しく意図を理解していると解釈した。その上で条件を提示されたとも。体裁を考えると最も正しいように思える。これを持ち帰れば不興は買うまい。

「王妃様の育ったところと聞き及んでおります。さぞ良い場所なのでしょうね」

辛辣なものを含んだ世辞に、王妃は微笑んだ。その笑みに伯爵が硬直するのも構わずに、王妃は深みのある声で続けた。

「やせた、つまらない土地ですわ。森と山しかない。でもわたくし

には思い入れのある土地なのです」

「なるほど、王妃様には大事な場所と。療養されるのにも良いですよ」

クリステイーナは伯爵に、その背後にいる侯爵に向けて言い放つ。エルマは黙って恥知らずと主の会話を聞いていた。話をもってきたのは伯爵なのに、主の意図するほうに持って行かれている。転地療養の誘いとはと内心で失笑するが、名目としては悪くないのだらう。

「まあ、それも本当にわたくしの体調が悪ければの話ですけれど」

優雅に扇子を振ってクリステイーナが話を終わらせた。伯爵はなすすべなく扉をくぐらざるを得なかった。空気を入れ替えるとエルマが窓を開ける。

「ねえ、エルマ。伯爵はわたくしが何も知らないと思っているのね」「尻尾をつかまれていると分かっていたら、いかに侯爵から指示を受けたからとはいえ、のこのこと顔を出せるとは思えません」

主と二人であればエルマはかなり辛辣な物言いをする。

「宰相殿が調べているようだけれど？」

「ただ時間が経過しております。実行した者は実家に戻されたり、不慮の事故など得ておりますので」

証拠や証人を集めるのに難航しているらしい、と匂わされクリステイーナは宙を見つめる。握っている証拠、転地療養の誘い、急いでいるのはこちらではなくあちら。

時間が自分の味方になるだろうと結論付けた。

そこに思いがけない訪問者があった。

花のない庭を国王と王妃が散策する。

急にやってきたランドルフから誘い出されてクリステイーナは困惑をかくせない。最近のランドルフはクリステイーナの理解をこえるような気がする。今までの言動に基づいた次の行動が全く予測できない。

夕暮れの庭園は庭師の丹精のおかげで、見事のひとことだ。整然と刈りそろえられた灌木や、影まで計算されたような木立、噴水は目と耳をも楽しませてくれる。

しばらく歩いて噴水の側に二人は腰かけた。

「陛下、どうなさいました？」

「クリステイーナ。デレク殿にはティーナと呼ばれているのだな」

「ええ、兄は昔からそう呼んでいます」

「私のことも陛下ではなく、名前で呼んでほしい」

ゆつくりと手を重ねられてクリステイーナはますます困惑する。

人目があるところでランドルフが親密な様子を表すことはなかった。時期が時期だけに必要以上の注目を集めるだろう。

いたずらに刺激することは避けたいと思いつながら、クリステイーナは手を引けないでいた。熱く包んでくれる大きな手を放したくなかった。

「ランドルフ……」

「クリステイーナ。私の王妃はそなただけだ。私を信じてほしい」

手だけでなく背中にも手を添えられて引き寄せられる。

クリステイーナは少しだけためらった後で、素直に身を任せた。

触れるぬくもりと感じる鼓動が鮮明になるように、ゆっくりと目を閉じた。

12 決心

デレクは五日ほど滞在して国へと戻っていった。見送りのクリスティーナの額にそつと唇を押し当てる。

「ティーナ、私はお前の力になりたい。思う通りにやってみて、それでも駄目なら頼って欲しい」

「ありがとう、兄様。どうかお気をつけて」

微笑むクリスティーナをデレクは眩しそうに見つめた。

クリスティーナを通して別の誰かを透かし見るような眼差しだった。

「本当に母上に似ている。だから父上もお前を目の当たりにするのが耐えられなかったのだろう」

クリスティーナは肖像画でしか知らない母だが、長ずるにつれてますます似てきたらしいのは周囲の反応からは察せられた。

忘れ形見のはずなのにあまりにも似すぎていて、近くにいれば命を奪ったと憎しみをぶつけてしまいそうで父は妹を遠ざけたのだろうか。とデレクは思う。

「父上も寂しい人なのだ」

「……分かっています」

人を想うことを知ったクリスティーナは頷いた。泣くな、笑うな、どこかに連れて行けと言いながら、父の方が辛そうだった。自分がいると否応なく二度と取り戻せない存在を思い出すのだ。

それだけ母が愛されていたのだと思うと今は羨ましさこそあれ、

父への恨みなどは感じない。悲しみを分かち合えなかった寂しさだけは拭えないが。

デレクはクリスティーナの後ろに控えたエルマに一瞥をくれる。それだけで通じたエルマが頭を下げた。手を取り合い、別れを惜しんでデレクは馬車に乗り込んだ。

デレクを見送ったその足で、クリスティーナは久しぶりに孤児院を訪問するつもりだった。いつも使っている馬車に御者が乗り、傍らに馬に乗った近衛騎士が付き添う。

城を出て賑やかな通りにさしかかった時、向こうから悲鳴と大声が聞こえた。

「暴れ馬だっ」

空の荷馬車を引いた大きな馬が、泡をふきながらひたすらに突進してくる。馬や荷馬車に引っ掛けられた人の悲鳴が飛び交う。狂ったように駆ける馬の勢いは誰も止められない。その行く手に馬車があった。

御者が進路を変えようとするが、間に合わずまともに暴れ馬と馬車がぶつかった。馬車は派手な音を立てて横転した。さすがに暴れ馬も行く手を阻まれて止まり、足を折るか傷めるかしたのか倒れこんだまま起き上がれない。

からからと馬車の車輪だけが空回っていた。

警備隊の隊員が駆けつけて人垣をかき分けて馬車にたどり着く。御者は無事な様子を確認して安心した後で、ごくりと唾を飲み込んだ。

装飾は抑えてあるがかなりの身分や経済力を有する人物のものを思われる馬車は、横転した際に破損している。誰も出てきた様子はない。中で気絶しているのか、あるいは……。

恐る恐る中を覗き込んだ隊員は呆けた声を上げた。

「誰も、いない？」

クリステイーナは孤児院で近衛の騎士からの報告を受けた。

「負傷者は？」

「暴れ馬に引つ掛けられた者の打撲傷くらいです。御者も騎士です
ので飛び降りて無事でした」

「そう、軽く済んだのなら良かったこと」

王妃はいつもと変わりなく受け答えをしているが、対する騎士の
表情は固い。

念のためにと無人の馬車を仕立てていて正解だったとしかいえない。
事故を目撃した者や、警備隊の隊員、御者役の騎士の話を総合
すると暴れ馬は異常な興奮状態だったようだ。それが全力で疾走し
てぶつかっている。馬車に人が乗っていれば無事ではすまなかった
だろうと推察された。

「あなた方の機転のおかげで大事に至らずに済みました。ありがと
う」

クリステイーナの感謝の言葉に、騎士はとんでもない、と頭を垂
れる。

直前に空の馬車を先行させると言い出したのは、王妃の侍女だ。
いつの間にか手配していた地味な馬車に王妃は乗り込んで、目立た
ずに城を出て孤児院へと赴いた。まさかこの事故を予測していたわ
けではないだろうが、結果的に危険を回避できた。

「もったいないお言葉にございます。これが我らの責務なれば」

騎士の礼を取った近衛は周囲の状況に目を配りつつ、庭に出て子供達の輪の中に入ってまわりつく男の子達に棒術を教えだした。

「王妃様」

エルマが声をかけると、小さな女の子の髪の毛を編んでいたクリステイーナがなあに？ と聞き返す。

「帰りにも別の馬車を用意しましょうか」

「同じ手は使わないと思うのだけれど。わたくしにできるのは待つことだけ」

穏やかな口調ながら物騒な内容だ。細く柔らかい子供の髪の毛を編みこみながら、クリステイーナはのんびりと応えた。

いつかの午後のようにおやつの後で夕食の支度までを手伝ったクリステイーナのもとには、近衛から城にも連絡が行ったのだろう、孤児院の周囲に配備されていた騎士とは別の騎士達も迎えに来た。

思わぬ人数の騎士達に守られながら城に戻る。さすがに今日は城下の屋敷には立ち寄れなかった。帰路は何事もなく、大仰な護衛を従える形になったクリステイーナは、そつと苦笑するしかなかった。

「まるで、わたくしが挑発しているよう」

翌日、宰相が執務室を訪れると王妃は昨日の事故の衝撃など感じさせずに、書類に目を通していた。冷静で同時に豪胆だと宰相は感嘆の念を抱く。

ひと段落つくまで宰相は声をかけずに待つ。王妃が応接用の椅子

に腰を下ろし、お茶の用意がされて空気が和らいだところで宰相が切り出した。

「陛下のご意向で孤児院の隣に警備隊の隊舎と詰め所を移転することになりました」

「まあ」

意外そうな王妃に、宰相は詳細を記した書類を差し出す。

「人口の増加に伴って警備隊の仕事も増え、隊員も増やす必要があります。従来の隊舎と詰め所は手狭でしたのでよい機会だと移転が承認されました」

孤児院の隣に警備隊。ランドルフの配慮にクリスティーナは黙り込んだ。

これで孤児院の警備もしてもらえるわけだ。気がかりが解消したこの成り行きは、ランドルフが自分を思いやってくれていることの証に他ならない。噴水の側で、自分を信じて欲しいと手を重ねたランドルフの姿がよみがえる。

「宰相殿。陛下へも勿論ですが、陛下のご指示を迅速に実行に移し、

「くれた宰相殿にも感謝いたします」

「ならば私にも直接言ってもらえないだろうか」

明朗な声はランドルフのものだった。クリスティーナと宰相が立ち上がり振り返るのを制して、ランドルフはクリスティーナの隣に座った。

「陛下、執務を抜け出されたのですか？」

クリスティーナの咎めるような響きにはそ知らぬ顔で、ランドルフは新たに用意されたカップを手に取った。一口飲んで宰相にどこまで話したか確認する。

書類を渡し口頭で説明したところまでと宰相が答えると、国王の顔になる。

「とりあえずは明日にでも孤児院の隣に増員した警備隊員を配置する。適当な建物があったように記憶しているので、順次移転だ」

「……陛下、本当にありがとうございます」

「近衛の報告は私も受けた。孤児院周辺で最近不審者も出ているそうではないか。そなたが訪問するのに危険きわまりない」

王妃に訪問先で何かあつては困る、としかつめらしく言いながら目が笑っている。

クリスティーナは何度感謝の念を述べても足りない気がした。事故も不審者も黒幕は分かっているのをあえて放置している状況で、尻尾を出してくれるのを待っている段階だ。孤児院の子供達の安全確保が不安材料だったのに、ランドルフが解消してくれるという。

こんなに甘やかされてしまつてどうしようか、そんな思いにとられる。差し伸べられた手に全力でしがみついてしまいそうになる。できるだけ想いが伝わるようにと、ランドルフを見つめて礼を言うことしかできない。

「わたくしのわがままで孤児院を訪れているのに、よくしていただいて。ありがとうございます」

何て可愛げのない言い方なのだろうと、クリスティーナは自己嫌悪に陥る。これが側妃だったら、目をきらきらさせて全身で喜びを表すだろうに。自分ときたらうわべをなぞるような……。

ランドルフは、そんなクリスティーナのささいな表情の変化を見

逃さないようにしていた。少し自分の方に体をずらして、まっすぐに見つめてくる。眼差しにも口調にも王妃の精一杯が感じられた。頬がいくぶん紅潮しているのを、クリスティーナ本人は気付いていないのだろうか。

本当に久しぶりに自分がする『贈り物』に、儀礼的でない感謝を受けていることがおかしいくらいに嬉しい。警備隊の拡充は城下の治安対策としても必要であり、それをここまで喜んでくれるのならいくらでもという気になる。

ただ王妃は手放して喜んでいくわけではないようだ。揺れる瞳に何かをためらっているように感じ、問いただそうとした時に宰相が口を挟んだ。

「時にブレンダ様が臥せっていらっしやるそうです」

クリスティーナが息を飲み、ランドルフは奥歯を噛み締めた。

宰相は穏やかな声で続ける。

「ここ数日のことのようにです。なんでも寝台で急に泣いたり、めまがいがあるとおっしゃったりしていると」

数日で思い当たるのは庭園の散策だとクリスティーナは振り返る。誰かがブレンダの耳に入れたに違いない。まだ初期の大事な時期に、動揺させるようなことがあってはならないのに。

「侍医は何と申している？」

「それが侍医には会いたくないと、その……侍医が懐妊の確定診断に慎重なせいかもしれません」

今はブレンダが親しんでいた侯爵家の侍医が側についていると知

らされて、クリステイーナはじつと考え込む。

ブレンダの不調の原因は間違いなく自分だろう。宰相がここで言い出したのも、世継ぎとなりうる子供の健やかな成長のためにやりわりと釘を刺す目的に違いない。できるだけ刺激することを避け、心穏やかに過ごさせないと一生の傷になるかもしれない。

クリステイーナは無意識に腹部に手を当てていた。

自分は空っぽだが、ブレンダのお腹には大事な子供がいる。それをふまえて行動しなければ。

「陛下、ブレンダ様を見舞ってさしあげて下さい。何より心強いと思われませう」

「時間の都合をつけて、そうしよう」

表情を消したクリステイーナはかつての氷の王妃だった。王妃として最善を選ぶ、ランドルフにも意図は伝わる。心情はどうあれ、大事な子供の問題には違いない。国王としてはそれに応えなければならぬ。

やってきた時の興奮して悪戯めいた気分は消えて、ランドルフは残りの執務を行うべく立ち上がった。宰相も付き従うつもりだろう、一緒に暇を告げる。

クリステイーナは二人を見送り、執務に戻る。当日中の書類を仕上げた後で、便箋と封筒を引き出しから机上に出した。逡巡し、何度か文字を書きつけようとして、結局は再び引き出しにしまう。

机に肘をつき握り合わせた手を額に押し当てて、目をきつく閉じてクリステイーナは揺れ動く自分の内面と向き合う。

まだ、もう少し、もうしばらく。

甘やかな関係に浸っていたかった。

夜にブレンダを見舞ったランドルフは結局朝までブレンダの側を離れられなかった。胸にすがって泣くばかりのブレンダをなだめたせいだ。どこにも行かないでと弱ったブレンダにすがられては突き放せない。夜明け近くによくやく寝入ったブレンダは、しっかりとランドルフの服を掴んでいた。

涙のあとを拭いながらランドルフは溜息が漏れるのを抑えられなかった。

王妃と側妃の両方にいい顔をして、結局は両方を悲しませる。クリステイーナを氷の王妃に戻すつもりはなく、ブレンダを泣かせるつもりもないのに。

デレクには大見得を切ったのに、結局は情弱な国王かという思いにとらわれた。

ブレンダが少し落ち着いたと侍女から聞かされた数日後、クリステイーナは侯爵と宰相、侍医と現在側妃についている侯爵家の侍医を呼び集めた。

長い長い会談の末、王妃の転地療養が国王に打診された。

ランドルフがクリスティーナの部屋を訪れると、侍女二人と刺繍をしている最中だった。突然の訪問に侍女はてきぱきと片付けをする。クリスティーナは刺しかけの針を枠にはめた布にとめる。手芸の用具をまとめて籠に入れ、侍女に渡した。

ランドルフはつかつかとクリスティーナの側まで行って、腕をつかむ。侍女と自分についてきた侍従の方を見もせず抑えた声で命令する。

「しばらく王妃と二人で話をする。誰も赦しがあるまで入ってはならぬ」

クリスティーナが私的な居間として使っているいくぶん小さな部屋に、二人きりでこもった。腕をつかまれたまま、クリスティーナは長椅子に強引に座らされた。ランドルフ自身はその隣にどかりと腰を下ろした。

腕を組んで前を向いたランドルフは唇を引き結び、怒りを抑えている様子がびりびりとクリスティーナに伝わってくる。

ランドルフはゆっくりとクリスティーナの方に顔を向けた。

「転地療養とは、どういうことだ？」

「痛めた腰や背中が思わしくないので」

クリスティーナの言葉にランドルフがはっとして、そっとクリスティーナの背中に手をあてがった。その手の感触をクリスティーナは何も言わずに味わう。

「まだ痛むのか？」

「……時々ですが」
「ならばしばらく公務を休んで、ここでゆっくりすればいいではないか」

クリステイーナはランドルフを見上げる。薄青い瞳は凧いだ光をたたえていた。

背中に当てられていた手を前に持ってきて、クリステイーナは両手で包み込んだ。この短い間に、自分を価値あるもののように扱ってくれた手を。

「もう決めましたの。北に行こうと思っています」

「療養なら温暖な地方にすればよい」

「わたくし、北の方が気が楽なんです」

話が望まない方向に転がる気がして、ランドルフは慎重に言葉を選ぶ。体ごとクリステイーナの方に向ける。目を覗き込んで、どんなささいな変化も捉えようとした。

「どれほどの期間療養するつもりだ」

「……長い期間とだけ」

「まるで、出て行ってしまおうようではないか」

冗談のように軽く言うつもりが、口にしてしまった瞬間に二人の間に不吉な重みを感じさせる。

クリステイーナに否定して欲しいのに、クリステイーナは視線を手に落とした。

やがてゆっくりとした眩きが耳を打つ。

「わたくし、戻りません」

「クリステイーナッ」

包み込まれた手を振りほどいて、ランドルフはクリスティーナの両肩を掴んでいた。力が入っていたようでクリスティーナが眉をひそめるが、それに気付かぬほどに衝撃が大きかった。

戻らないとはどういうことだ？

考えるのを、意味を理解するのを拒否する自分がいる一方で、クリスティーナが真剣なことも無意識に判断している。

「冗談は、よせ」

「陛下、わたくしは……」

「名前で呼べと、そんな他人行儀な」

ランドルフと囁かれる。何年もの間陛下、王妃としか呼びかけなかったのがようやく打ち解けられたと思ったのに、なぜ戻らないのだと言い出すのだろう。ランドルフは混乱する。

だが次にクリスティーナは無情な一言を言い放った。

「わたくし、王妃を退きたいんです」

沈黙が支配する。馬鹿なとしか浮かんでこないランドルフに対し、クリスティーナは少し顔をうつむけている。

肩を揺さぶって強引に上向かせる。惑乱は怒りにとってかわろうとしていた。

「そのようなたわ言が通ると思うのか。見くびられたものだ」

「宰相殿と、ブレンダ様の父君の侯爵は賛同なさいました」

一笑にふしたランドルフに冷や水が浴びせられた。

「わたくし、王妃の位を売り渡しましたの」

恥知らずはこんな時だというのに、あでやかに微笑んだ。

事故から数ヶ月、今更転地療養などと言い出した拳句王妃を退く、ここには戻らないなどと。

「なにを馬鹿なことを。そなたは私と共にと誓って、婚儀を挙げたではないか」

王族として生まれ育った者が義務を放棄できるはずがない。ましてや同盟という国家間の問題が絡んでいるのに。

性質の悪い冗談にしてしまおう。公務はしばらく、誰がなんと言おうと休ませる。数日はクリステイーナを離さずにおこう。

そうすればこんな突拍子もない考えなど立ち消えになってしまうはずだ。

「私の王妃はそなただけだ、私を信じて欲しいと伝えてあっただろう？ クリステイーナ」

頼むから微笑んで同意してほしい。いつまでもここに、自分の側にいると言ってほしい。ランドルフの願いをクリステイーナは打ち砕く。

「わたくしが王妃を退き、ブレンダ様が王妃になる。利害が一致しましたの」

「利害などと」

「そうすれば、生まれてくるお子は側妃の子ではなく王妃の子となります。外聞もいいでしょう？ わたくしは代価を、ブレンダ様は名誉を手に入れる。双方ともに満足のいく結果になると判断し

ました」

薄笑いを浮かべるクリスティーナは、笑っているのに氷の王妃のあだ名に相応しくひどく寒々しい。

その笑みが冷笑だからか。

「そなたは……どうするつもりなのだ」

喉になにかがつかえて声が上手くでてこない。宰相と、有力貴族である侯爵が王妃の退位に同意しているのであれば、決定事項に等しい。表と裏から、内外にこの話を広めているに違いない。

それにクリスティーナが加担している。それも積極的に、いや、主導して。

転地療養の話も打診ではなく、通告なのだ。自分を、国王だけを置き去りにした。到底赦せるものではなかった。

手放しがたくなった今になって、ようやく心が通い合ったかと思っただけなのに、行って行くと言うのか？ 数ヶ月前なら、少なくとも事故の直後ならなんとも思わなかっただろうにと、皮肉さにランドルフは笑いそうになる。

「生国には戻りません。わたくしの持参した領地は生国に返したいとは思いますが。わたくしは、領地に隣接した土地をいただけたらそこで修道院の院長になります。ゆくゆくは孤児院も併設しようかと思っています」

修道女になってしまえば政治的に利用されることはなくなるだろう。クリスティーナはそう考えた。

元王妃、元王女などという肩書きは厄介ごとしか招かない。宗教で多少なり身を守ればあとは穏やかに過ごしていける。

宰相からは領地と隣接する土地の割譲には反対されなかった。あ

んなやせた辺鄙な土地など自分に譲っても、この国には痛くもかゆくもない。

修道女になって孤児院を建設して、いずれは城下の孤児院から成長した子供達が訪ねてくれれば、人や技術の往来が始まる。遠からず父に代わって国王になる兄のためにも有用だろう。

「そなた、最初から計画していたのか？」

そうでなければあまりにも手回しが良すぎる。なにかもクリスティーナの思惑通りではないか。

「ブレンダ様の方がランドルフには相応しいのです」

「 黙れ」

ランドルフはクリスティーナを荒々しくかき抱き、自分の胸に押し付けた。

他の誰も入る余地なく触れ合っているというのに、ランドルフはクリスティーナとの間に埋めがたい距離を感じる。

「何故そんなことを言うのだ。そなたの本心はどうだ？ 私の気持ちはどうなる？」

「ランドルフは、わたくしでなくブレンダ様を王妃にしていればとお思いになったことがありでしょう？」

否定するより早く強張る体が肯定の意を示す。確かにそう思っていた、つい最近まで。めとった王妃に親しみが持てず、その後でやってきた全身で好意を示す側妃に惹かれても無理はないだろう。

クリスティーナが懐妊せず、また自分が気まぐれで孤児院を見学にいかなかったら遠からず王妃の交代劇があったかもしれない。その際自分はむしろ望ましいとさえ思ったはずだ。

実際には思っても見なかった王妃に出会い、その寂しさと不器用さを知った。

向けてくれた笑顔に胸が苦しくなるような想いさえ味わった。それを今になって。

「そう思われても仕方ないわたくしの振る舞いだったのです。ブレンダ様は一途にランドルフを想っていらっしゃる。ご実家はランドルフを支えるでしょう。」

この筋書きでわたくしは体面が保てて、生国へも最低限役立つことができるのです。どうか、わたくしのわがままをお聞き届けください」

肩に額を当ててクリステイーナが説得する。
ランドルフとて、クリステイーナの言い分が理にかなっているのを否定はできない。

理性は納得しても、感情はそうはいかない。

「両国間の問題だ。そなたの一存で決められる話ではない」

「兄は承諾しています。父も、領地が戻り今後関係が悪化しない限り反対はしないでしょう」

ここに至って、完全にクリステイーナにしてやられたと観念するしかなかった。

これ以上反対しても今度は自分のわがままになってしまふ、とランドルフは悟った。

「ランドルフ。生まれてくるお子と、その母君を第一にお考え下さい。氷の王妃を切り捨ててください」

それが多数の幸福につながります、と小さく呟いてクリステイーナはゆっくりと拘束から抜け出た。見上げる薄青い瞳には迷いはなかった。苦悩するランドルフを映していてもだ。

「そなたは、残酷だな」

こぶしを握り、ランドルフは静かに立ち上がって部屋を後にした。正論を振りかざして根回しをし、退路も断つ。書いた筋書き通りにランドルフも承認せざるを得ない。

クリステイーナの表情は変わらなかった。凍ったような無表情のままだった。

クリスティーナは翌日から荷物をまとめ始めた。王妃の退位などは手続きは煩雑な上に時間がかかる。その前に必要な書類に署名だけをして、さつさと北へ行くつもりだった。正式に退位するまでは持参金代わりの領地の離宮に滞在し、退位がかなえばそこを出て新生活を始める予定にしている。

エルマは驚いた様子もなくクリスティーナの説明を受け入れたが、ジエーンはそうはいかなかった。

やっと王妃が城内でも貴族達から認められるようになった矢先の話に、しかもゆくゆくは側妃と入れ替わりになるという話に憤りと感傷を強烈に滲ませる。

「あんまりです、王妃様」

「わたくしが決めたことですもの、ジエーンが憤慨する必要はなくてよ」

華美なドレスは要らない、ただ宝石が縫い付けられているものは今後の事業のもとでになるからとドレスを選別し、不用品を処分する。そうしてできあがった荷物は驚くほど少なかった。

クリスティーナの希望通りに領地に隣接する土地が与えられ、城下の孤児院への後援も今までどおりと明文化される。ブレンダの父である侯爵と、国から元王妃の体面を保つに相応しいと思える収入も得られた。

明日は城を発つという前夜、クリスティーナはささやかな宴を催した。

自分についてくれた使用人、護衛をしてくれた騎士、数は少ないながらも慈善事業に賛同してくれ協力を約束してくれた貴族達に向けて感謝の意を表した。

会場には国王と側妃は現れなかった。ランドルフにはクリスティーナが会つのを断り、ブレンダはクリスティーナに合わせる顔がないからと断られといった次第だ。宰相だけは顔を見せた。

「宰相殿、このたびの尽力に感謝します」

「かの地でもお健やかであらせられますように」

宰相はクリスティーナの背後に立つ侍女、エルマを認めてそれと分からぬほどに会釈をした。エルマも同様に礼を返す。

宴に出席した人々は、氷の王妃の笑顔を目の当たりにして誰にとつても忘れられない夜になった。

翌朝、まだ早い時間に目立たない馬車がつけられる。旅支度をしたクリスティーナはエルマを伴い、馬車に乗り込む。

そこに決意を固めたといった風情のジェーンが追いすがってきた。

「私も供に加えてください」

「あなたは今度はブレンダ様の衣装係になるはずでしょう？ わたくしが行くのは北のはずれなの」

「いいえ、城ではなく王妃さ……クリスティーナ様にお仕えしたいのです」

若い娘の一時の浅はかな考えではない、と主張するジェーンにクリスティーナは根負けした。エルマの隣を手で示して微笑む。

「とても寒いところよ。風邪を引かないでね」

ぱあつと顔を輝かせたジェーンが乗り込むのを待つて、馬車は静かに動き出した。

後に荷物を載せた馬車が続く。その列が小さくなって見えなくなるまで、ランドルフは身じろぎもせずに見つめ続けた。

「今ほど泣けないのがあるがたいと思ったことはない」

窓から景色を眺めながら、クリスティーナはぼつりと呟いた。

何日かしてランドルフはブレンダを見舞うべく、部屋へと赴いた。喪失感は拭えず、何もする気にはならないが懐妊に加え、いずれは王妃への戴冠式など控える身でもある。顔を見て不都合などないか確認しようとの考えからだった。

部屋に近づくとつれておかしな空気をを感じる。部屋の前の護衛の騎士がランドルフを認めてかしくまった。

「どうした？」

「父君の侯爵様がおいでです」

遠からず義理の父になる侯爵もいると聞いて、そのまま部屋に入る。先触れがされていたはずなのに寝室の前で立ちすくんで困っている様子だ。聞くと、誰も部屋に入れるなど侯爵が大変な剣幕らしい。国王の先触れなど無視できるはずもないのに、耳に入らない様子だとか。

全く侯爵らしくないと思いつつ、少しだけ扉を開けさせる。

途端、激高した侯爵の声が飛び込んできた。

「懐妊が間違いなどと、よくも。私の顔に泥をぬる気が」

「お父様、ごめんなさい。どうか、どうかお赦しを……」

「私が王妃にいくら払ったと思っただけだ。それもお前と子供の地位を考えてだ。それを、間違いで済むかつ」

扉に手をかけた侍従長が蒼白になっている。自分でも顎が固く強張るのを感じた。

夜会であれだけの人物を前に宣言したのが、間違いだと？ 自覚症状も他覚症状もあると申ししていたではないかと、齒軋りしたいほどの感情がわきあがる。王妃は身を引いて去っていったと言つのに無駄だったのか？ ふつふつと怒りが湧き起こる。

小声で侍従長に宰相を至急呼ぶようにと命令し、扉の向こうのやりとりで集中する。

泣いて話にならない娘を前に、侯爵が怒鳴り散らしている。合間に侯爵家から連れてきた侍医がとりなすような声も聞こえた。

「泣いていても始まらぬ。これをどう收拾するかが問題だ。流れたことにするか？ 王妃の仕業にはできない。あの時のようには」

聞き捨てならない言葉が耳を打った気がする。ブレンダが泣き止んだ気配がした。

「お父様、あの時とは、まさか」

「お前より早く王妃が懐妊したのだ。世継ぎであってみる、お前の栄達は望めない。だから伯爵に命じて……」

「王妃と子供に手をかけたのか？」

たまらずに扉を開け放ち詰問する。誰が入ってきたとなじろうとした侯爵が動きを止める。

ブレンダは寝台の上で口に手を当てていた。それらは認識したが、今は侯爵の言葉だけが脳裏にこびりついている。

「答えよ。階段の件はお前の指図か？」

「陛下……」

土気色に変わった侯爵の顔色が、事実だと述べているようだ。娘の栄達のため、そのために。そんなことのために。

駆けつけた宰相が目で問うてくるのに、端的に事実を述べる。

「け、して、私は、そのような恐ろしいことを、命じた覚えは……」
つかえながら言い募る侯爵を、宰相がさえぎった。

「面白い資料が手に入っていました。王妃様付きの掃除係、階段補修担当の宮繕係とその上役、上役の遠い親戚の伯爵……。ここまで言えばなんのことかお分かりでしょう？」

とうに消したはずの生きた証拠と自分にいたる関係をつきつけられて、侯爵の体から生気が抜けたように見えた。その場に崩れるように座り込む。

「審問官を呼べ。侯爵と伯爵の身をゆだねよ」

審問官の単語にブレンダがひっと息を飲む。相手の身分に関係なく審問を行う審問官は、審議の公正さは勿論だが望む告白を引き出すことに長けている。その告白が得られるまでの審問の苛烈さは、女性が目の当たりにすれば卒倒するだろう。無論目を付けられた本人達にも耐え難いものになる。

「王族に手をかけた罪を、一族の血であがなってもらおう」

自分の宣言にブレンダが怯えた顔になる。この様子では知らなかったと見える。だからといって見逃せない。

全身をぶるぶると震わせて碧の瞳は新たな涙を浮かべている。すぐるような面差しは哀れを誘うが、愚かしさは否めない。

「へ、いか。私は……」

「特別の温情をもってしても生涯幽閉だ。覚悟しておけ」

その顔が絶望に染まるのは痛ましい。しかし王族に手をかける罪は万死に値する。例外は、ほぼないに等しい。にわか慌しくなる周囲への興味は失せて、ランドルフはきびすを返した。

侯爵と伯爵の断罪、一族への処断、領地の没収など煩雑な処理が必要になる。宰相に処理を任せ、ついで王妃の退位の事務処理の中止を命じる。

不思議なほどに冷静だ。怒りも突き抜ければこのような心地になるのか、とどこか他人事のように思う。

今、頭にあるのは静かに去っていった王妃のことだけだ。

まだ 間に合うだろうか。

北のはずれはまだ寒さが残っていた。暖かい室内でお茶を注ぎながら、エルマがクリステイーナに世間話のついでのように話しかけた。

「ブレンダ様の父君の侯爵が、伯爵ともども罪を問われたそうです」「そう……ブレンダ様は？」

「情報が錯綜しております、まだ詳しいことは分かっておりません」

にわかには苦味を増したお茶をクリステイーナは黙って飲んだ。

父親が断罪されたのなら側妃は心細いに違いない。子供は大丈夫だろうか。心労で体調を崩していないだろうか。短期間ながら子を宿した身から、あの期間は驚くほどに感情が揺れ動くことは想像できる。

「少し、庭を散策するわ」

いまだとけきれぬ雪の積もった庭も、クリステイーナの散策する辺りは雪が払われている。針葉樹のくすんだ緑と、立ち枯れたような茶色の色彩に雪の白が照り映えている。珍しく日差しは明るく、雪に反射した光で眩しいほどだ。

階段の一件が明るみになり、汚名はすすがれたようだ。ただ気は晴れない。

失った子供が戻るわけでもなく、ブレンダがいずれはランドルフの子供を産む。その子の立場は微妙だろうが、ランドルフなら悪いようにはしないだろう。

ブレンダが失脚したとしても別の女性が王妃なり側妃に立つ。

自分は正式な退位の通知が届けば、この離宮も出て修道院に入るだけ。終の棲家になるはずの修道院と孤児院は建設に着手している。しばらく歩き回り室内に戻ると、意外な客が来ていた。

鼻の頭を赤くしたボブが恐縮したようにエルマからお茶を出されて座っている。

クリスティーナが部屋に入るとはじかれたように立ち上がった。

「王妃様、久し、お久しぶりです」

「まあ、ボブ。よく来てくれたこと。わたくしはもう王妃ではないので、クリスティーナで結構よ」

「ク、クリスティーナ様。孤児院の院長と子供達からの手紙を預かっています。俺は親方からこっちの様子を見て来いって」

「そうね、ためし掘りさせた鉱物を持たせるので見極めてちょうだい」

エルマもジエーンも孤児院に通い顔見知りになっている。ボブも、段々と緊張がほぐれたらしく孤児院のことを中心に話が弾んだ。

「庭に出てみる？ 厳しいけれどわたくしには懐かしくて美しい眺めなの」

防寒をしつかり施されたボブと、寒さには慣れていて薄着のままのクリスティーナはエルマを後ろに庭に出た。

ボブはこんな雪は体験したことがなかったようで、道中から興奮していたと告白する。雪がそのまま残っている場所に目を向けて子供っぽい顔つきになった。

「ちびがいれば、大騒ぎだろうな」

「色々雪遊びができますからね」

「冬も楽しいけれど、避暑地としても楽しめると思うわ」

ジェーンが押しかけ侍女になったように、クリスティーナの近衛騎士二名はここにクリスティーナ達を送り届けた後、城には戻らなかった。

隊長には除隊届けを出してある、北の辺境では男手はいくらあっても足りない。まして身分を考えると護衛はつけていた方がいいと説得されて結局彼らは北の離宮にいる。あれこれと働いてくれて、庭の雪かきも庭師に協力しての彼らの仕業だ。

「孤児院はどう？」

「おう……クリスティーナ様に頼まれたって言う伯爵夫人がよくしてくれます。国王様からも、定期的に必要なものが届けられています」

孤児院の援助継続を条件の一つにして北へと去ったけれど、上手く運営されている様子にクリスティーナはほっとする。

気まぐれで手を差し伸べて突き放す。孤児院の子供達はいやと言うほど経験しているから、自分の仕打ちが傷になっていないか気がかりだった。ボブにそう言うと、きっぱりと否定される。

「クリスティーナ様は一時的なものではなくて、俺達が一人でもやっついていける援助をしてくれた。読み書きも計算も、色んな仕事の世話も礼儀作法も。造ってくれた宿舎の工房のおかげで、そこで作ったものも売ることができる。下働きじゃないもつとちゃんとしたところで働くことができる。孤児院の出身だって卑屈にならずに生きていける、クリスティーナ様はそんな力をくれました」

まっすぐにクリスティーナの心に届く力強い言葉に、胸が熱くなってくる。

人として、前を見て生きる力。それこそクリスティーナが欲した力だった。子供達に種がまかれ芽吹いて、ボブなどは力強い花も咲きそう。空っぽだった自分が誰かの役にたつことでゆっくと満たされていく。そんな気がした。

過去は変えられなくても未来は作れる。子供をなくしたクリスティーナと親を失った子供達の結びつきは、反対の境遇ながらもぴたりと合わさり新しい関係がつくりだせたように思えた。

「わたくしも、皆から生きる力をもらったの。ここへは逃げ出してきたようなものだけれど。戻る場所はなくても行く場所はつくれるでしょう?」

「はい。それで一人前になったら、いつか家族をつくりたいんです」

照れくさそうに夢を語るボブをエルマと二人で姉のような、母のような気持ちで見つめる。ボブならいい夫や父親になれるのではないか。気立てのいい女性を妻にして、やがて子供が生まれて……。

「楽しみね。わたくしも、お母さんになりたかったわ」

ふと口をついた言葉にああ、と納得する。流産した後で自分の現状と今後を認識して冷静なつもりで動いたけれど、ずっとこの気持ちを引きずっていたんだと。

ランドルフの子供を産んで育てて。 ランドルフと家族になリたかったのだと。

ふいに束の間の触れ合いを思い出して目蓋が熱くなる。どうしたのと思うまもなく、熱いなにかが頬を伝った。ボブとエルマがひどく驚いた顔をしているのに、視界はぼやけている。

「クリスティーナ様、泣いていらっしやるのですか?」

「わたくしが、泣いて?」

頬に指先を当てると濡れたものが触れる。涙などとうに流すことを忘れたはずなのに、あとから湧いてくる。ボブがあたふたしながらハンカチを差し出そうとしたのより早く、クリスティーナは後ろから抱きすくめられた。

包み込むような大きな体と香りはここにいるはずがなかった。

「ボブ、だったか。悪いが慰めるのも泣き止ませるのも私だ」

低い、それでいてよく響く声が頭上から降ってくる。既に驚きで止まりかけている涙は、ハンカチでそっと拭われた。なぜという疑問詞ばかりがあたりに満ちている。

「へ、いか。なぜここに……」

「迎えに来た。私とともに戻って欲しい」

ここは寒い、中で話そうと国王は皆を室内に促した。お茶の用意だけしてエルマはボブを引きずるように退室し、気まずいクリスティーナとありがたそうに熱いお茶を飲むランドルフだけが残された。一息ついてランドルフはクリスティーナの目にそっと指を這わせる。顔をのぞきこんで笑いかけた。

「泣き止んだか。そなたの涙を初めて見た」

「わたくしもいつ以来か忘れてしまいました」

泣けば周囲が迷惑を被る。それを悟って涙を封じたのはやはりこの離宮だった。

「何に対して泣いていたのだ？」

「失ったものに対してです」

未練を断ち切るように唇をきゅっと噛んで、クリスティーナはランドルフから距離をとった。臣下の礼を取る。

よそよそしい振る舞いに、ランドルフは少しだけ落胆する。

「そなたを迎えに来たのだ。城に戻って欲しい」

「ブレンダ様とお子様は」

「懐妊はしていなかった。ブレンダは側妃を退かせて修道院に入れた」

意外な処置にクリスティーナは目を見開いた。ランドルフは結局ブレンダを父親と同じにはできなかった。利用されないように、修道女にして監視の厳重な修道院に預からせた。

貴族の姫君から自分のことは自分でやる生活へと変わってしまったが、父親の罪を悔いて祈ってくれればと考える。心をよせた女性だ。どんな形であれ生きていてほしいとランドルフは処断した。

「そう……でしたの。でもわたくしは城に戻る理由がありません」

「理由ならば、そなたは私の王妃だ。転地療養が終わるのを待ちきれずに迎えに来てしまった」

クリスティーナはかぶりを振る。もう王妃ではないし、この身が城に戻っても役立たずには変わりない。

そんなクリスティーナに、ランドルフは小さな袋を差し出した。中には白い小さな花が土ごと入っている。

「この、花は」

「そなたの封蝋の印で、私にいつも刺繍してくれた花だ。これの意味をデレク殿に教えてもらった」

クリステイーナが見る間に赤くなる。そんなうろたえぶりは初めてで、クリステイーナも花の意味を熟知しているのが分かる。

寒さ厳しい北で、雪のとける頃に最初に咲く花。

年頃の娘は意中の相手にこの花を刺繍したものを渡す。そして若者は花を意中の相手に渡す。そんな風習だった。

「そなたが手紙をよこしてくれるたび、刺繍したハンカチを渡してくれるたびに想いをこの花に託してくれていたのだろうか？」

だから手ずから掘り出したのだとランドルフは微笑んだ。

氷の王妃と呼ばれ仮面をかぶったような年月の中で、密やかによせられた想いに気付いた時に愛しさがあふれた。王妃の退位も、だから本心からではないと混乱しながらも確信できたのだ。

「これを受け取ってほしい。そして一緒に戻ろう」

「わたくしは、あなたに子供を授けることはできません。第一王妃の位を売り渡しております」

「代価を返す相手はもうおらぬ。それに未来のことなど誰にも分からぬではないか。私はそなたがいいのだ。そなたでないと、駄目なのだ」

クリステイーナは耳まで赤くしながらランドルフを見上げた。その瞳が潤みだす。

「わたくしが、役にたてるのですか？」

「役に立つ立たないではない。そなたと一緒にいたいのだ」

袋を両手で持ったクリステイーナを前に、ランドルフはひざまずく。そつと片手をとって手の甲に口付けた。かくりとクリステイーナの膝が折れる。ランドルフの前に座り込んだクリステイーナは、

ぼろぼろと涙をこぼしていた。

「わ、わたくし。わたくし……」

「戻ってくれるな？」

ああ、氷の王妃の氷がとけたのだとランドルフは思った。こんなに熱い涙を流せる者が、氷であるはずがない。

肩を抱き寄せ花を潰さないようにそっとクリスティーナを包んだ。しばらく泣かせるままにして、涙を拭う。泣き濡れた顔で見上げるクリスティーナは幼い少女のようだった。

「でも、わたくし、ここでやることができます」

「孤児院の件なら修道女をまわせばよい。そなたの孤児院の子供も職員として協力してくれるだろう」

「この領地を生国に返す件と、隣に賜った土地はどういたしましよ
う」

「こちらが振り回した形なので、そなたの好きにすればよい。随分とこの辺りに執着しているようだが、何かあるのか？」

宰相に王妃を迎えに行くと言えた際に、では現地をよくご覧下さいませと妙な念押しをされた。

不思議な顔になっていたので、宰相は穏やかに微笑んだ。王妃様は先の先まで見ていらっしやいます、と。王妃付きの侍女は実に優秀ですな、とも。

案の定、当て推量のランドルフにクリスティーナが疚しそうに目をそらした。

「このこと、隣接する土地には有望な鉱山があります。採掘とその後
の加工を共同でできればと、孤児院の子供達が弟子入りした工房
にも声をかけておりました」

つまり、新しい産業を興そうとしていたわけかとランドルフは感心して、呆れた。

生国へも利益をもたらす北の辺境の暮らしも豊かにする気とは、わが王妃は本当に女性の皮をかぶった男性なのかもしれない。

「それもおいおい取り決めよう。まだ何か障害があるか？」

たたみかけられて、クリスティーナは観念した。

手の中の花を見つめ、ランドルフに視線を移す。そして。

ランドルフはうろつくと室内を歩き回る。とても執務など手につかない。

それなのに宰相はいつも通りに書類の束を持ってこさせて、ランドルフに座るようにと有無を言わせない。

「座ってなどいられるか」

「陛下が歩き回ったからといって、何の助けにもなりません」

「もう丸一日だぞ」

「人によって異なりますが、最初は時間がかかるものです」

奇跡的な懐妊　侍医は懐妊は難しいだろうとは申し上げたが、無理とは言っていないと弁解していたが　その後、クリスティーナが産気づいて丸一日が経過しようとしていた。城中が王妃の様子に固唾をのんでいる。

転地療養から戻った王妃は、もう氷の王妃ではなかった。ようやく人々からの尊敬と親しみを勝ち取り、ランドルフと子供がなくと

も仲良く暮らしていければとの心境だった頃に、思いがけなく懐妊した。

ランドルフの歡喜は、すぐに憂慮に変わる。あんなに細くて大丈夫なのか、なによりクリスティーナの母は出産で落命している。もし、クリスティーナがそんなことになればと恐怖すら感じた。

「わたくし達を選んでくれた命ですもの、なるようになります」

既に強さを獲得して微笑むクリスティーナとは裏腹に、ランドルフは情けないが内心はびくびくし通しだった。

いざ産気づけば自分にできることなど何も無い。クリスティーナの部屋で待とうとすれば、うろつろされても迷惑とエルマから暗に脅され、執務室へと追いやられる。執務室でも落ち着かないのは変わりなかった。

「なぜそなたは落ち着いているのだ」

「同じような思いを四度経験いたしましたので。なるようにしかない、最後は女性次第ということを嫌と言うほど理解したからです」

書類を選別しながら宰相は諭す。

ランドルフの目の前に書類を置いた。

「署名だけすればよいものです。これだけでもお願いいたします」

しびしびペンを取り、名を書き記そうとした時に興奮した面持ちの侍従長が入ってきた。

ランドルフはペンを取り落としたのも気付かなかった。

穴のあくほど侍従長を見つめる。侍従長は何度か唾を飲み込み、唇を湿らせて声を出した。

「男の子です。王妃様もお健やかで」

最後まで聞かずにランドルフは立ち上がり、駆け出した。書類が散らばった気もするが、構ってられない。近衛が間に合わないほど急いで王妃の間へと急ぐ。

寝室へと入れば、大仕事のあとのほっとした空気を覆すように元気な泣き声が響いていた。

クリステイーナがランドルフを認めて、疲れた顔に笑みを浮かべる。

「陛下、生まれました。見てやってください」

綺麗な布に包まれて元気に泣いている子供を、ランドルフはこわごわと受け取って覗き込む。

髪の色は自分、目の色はつぶっているから分からない。軽いのに、不思議に重く感じる。目頭がじんわりと熱くなった。

そつとエルマに渡して寝台に横たわるクリステイーナの手を握る。

「ありがとう。疲れただろう、ゆっくり休め」

いたわりの言葉にクリステイーナが微笑みながら涙を一筋流した。

「嬉しい時にも、泣いてしまうのですね」

「ああ。……そうだな」

氷の王妃の氷がとけた時、喜びだけが満ち溢れる。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4490z/>

氷の王妃

2012年1月11日07時00分発行